

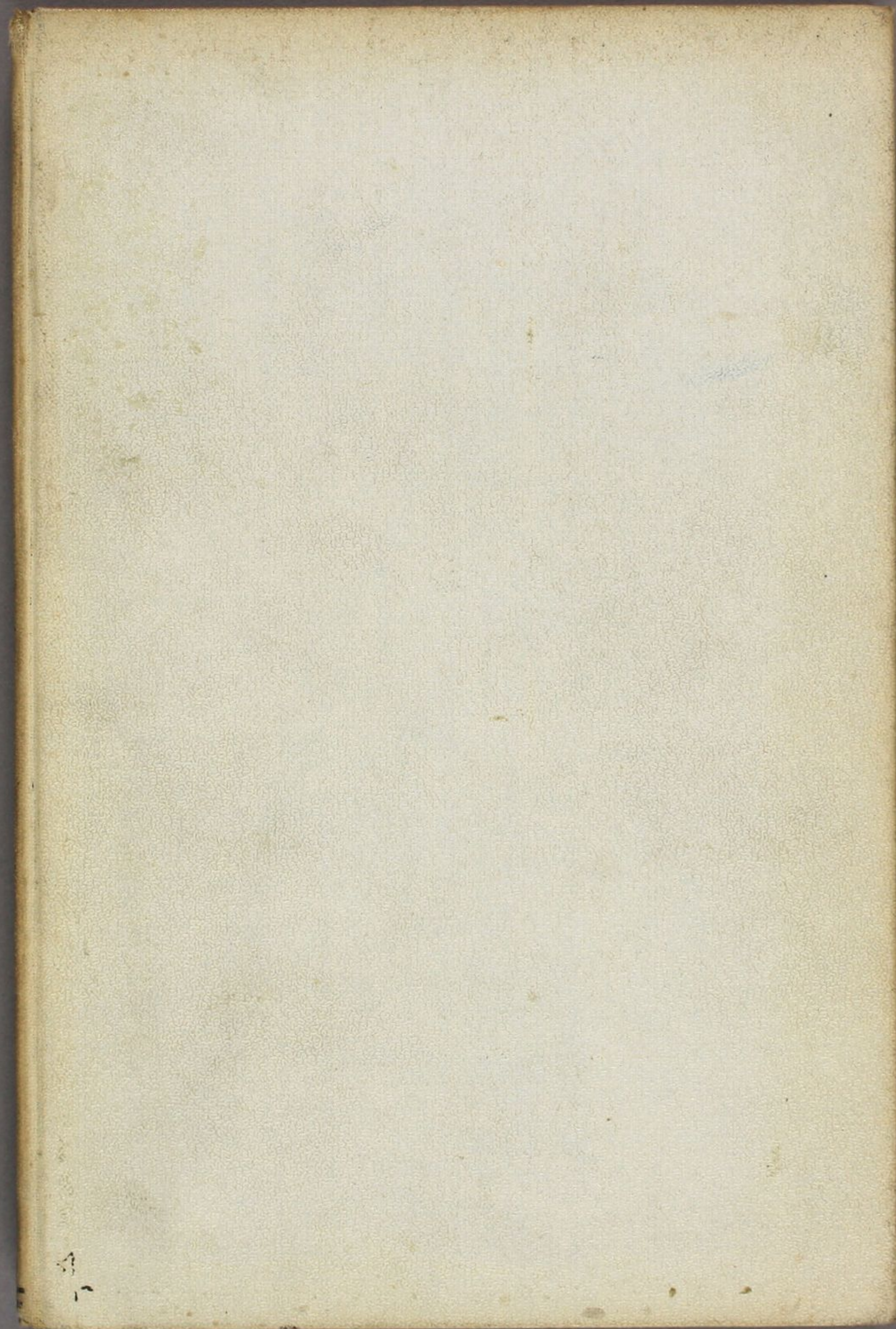




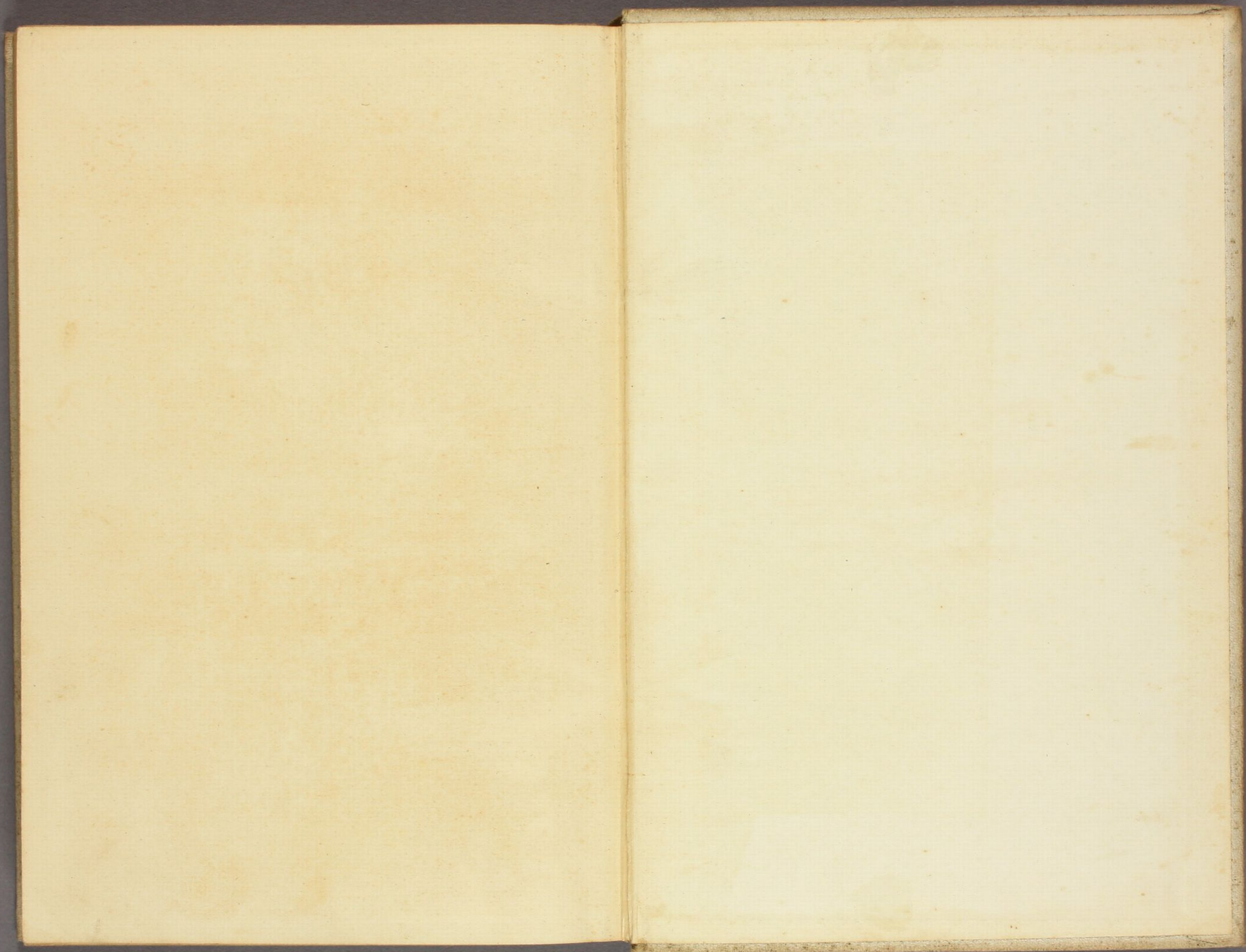
異教の國の春

青山郊汀著











異教の國の春

青山郊汀著



異教の國の春

青山郊汀著



異教の國の春日次

風	.....	一
雨	.....	二
楠の梢	.....	四
無題	.....	
自然と吾	.....	八
呂清	.....	一〇
詩	.....	一〇
歌澤寅之助	.....	一四
再び歌澤寅之助	.....	一六
風	.....	一七
可愛い赤兒	.....	二一
夜	.....	二二



乞食.....二四

豊竹呂清.....二六

夜のメランコリイ.....二七

朝顔の花.....三〇

詩.....三三

Exotische Lieder.....三三

木 苺.....三四

海.....三六

月 光.....三八

復活祭の夜の悲哀.....四〇

夕暮の紫.....四二

森鷗外君に與ふ.....四三

暮れ方の東京市.....四五

獨.....四六

雨.....四八

雲.....四九

新宿の朝の歸路.....五一

うすみどり.....五三

自 然.....五四

竹本美光.....五六

敵.....五七

怨 み.....五九

獨生きたら世界も生きた.....六〇

悲 み.....六一

狂 女.....六三

戀の殻.....六六

世の終りと世の始まり.....六八

四月の朧な夜.....六九



獨なる吾	七〇
一九〇九年のその晩	七一
無題	七三
紫	七四
秋の夕日	七五
秋の聲	七六
夢の光	七七
お七の幻の暗示	七八
戀の暗闘	八〇
女に與ふ	八一
戀のをはり	八二
秋と吾	八四
人妻に與ふ	八四
怨靈	八五

夢	八六
ねむの葉の蔭の饒舌	八七
君は賣女	八九
昨日今日	九一
世界滅盡	九二
野守の心	九三
秘密經	九四
藝術	九六
通夜の雨	九六
旅人	九七
虹の影畫	九九
みつわ姫	一〇一
白い死	一〇三
箭	一〇四



曙	104
最後	106
鶴の額と女の乳房	107
尼寺の櫻	109
死する女へ	111
詩	114
初秋物語	115
詩の乙女	116
露の命	117
君は見て	118
寄席の看板	119
ふられ女	120
死こそほゝえめ	125
別れし女	127

み 姿	129
園の半日	130
黒い蝶々	131
五月の戀	134
三日月	135

散文詩

夕暮と雨との詩	136
美し夜	141
夕暮の音	142
途上の微雨	143
雨	144
萬有と私	148
金の十字架	149
青山の遊び	149



悪い女……………一五〇

好きな女……………一五一

自由は死んで居る……………一五二

吾に酔へる藝術……………一五三

私……………一五五

他人……………一五九

幻の短銃……………一五九

火の釘……………一六一

矛盾觀……………一六二

女義太夫……………一六二

二つの角……………一六五

雁犬……………一六六

戀女房の化の皮……………一六六

(附録) 三保の浦島噺の千鳥(淨瑠璃)……………一

# 異教の國の春

青山 郊 汀

## 風

可愛きメロダイ——雲のほほえみよ、  
 ロルベルの葉の茂のささやきを、  
 聞くならむか、ああ、靜なる風の媒介、  
 やがて、わが心の悲みをふきぬぐへ。

千早ふる神秘の森のしみづよ、  
 そは高きアポロの林の母と、  
 その黛のヴェールとに包まれて、



いつしかもリウラとひびく。

かよわき草にファウンの、  
さみしき風のしらべは傳り、  
いつまでも居眠れる天使は、  
今し、風の搖籃に——それよ目覺めぬ。

ゆるやかな水の流は、  
すすしき月光に酔うて、  
謠つ、舞ひつ、たわむれて、  
ああ、大自然は風のごとく生きぬ。

## 雨

雲はながき歴史の酒によひて、

永遠の空なるすみかを忘れ、  
けふこそかぎりなき悲哀の里に、  
かくて、天地は白き涙のうちにかぶ。

めざめたる赤兒の戀のすすりなきよ、  
雨はヴェーヌスの瘦せぬる乳をぬらし、  
罪ふかき悪魔の弱き述懐を、  
灯蔭なる磔刑のクリストは聞く。

戀のすすりなきよ。冷き蛇は、  
人生の祝福の盃に——黒き舌をば、  
めくるめき酔ひ戯れて、さし入れぬ。  
雨はふる。かぎりなく雨は盃にそそぐ。



リウラはなりて、シユフインクス、  
 深き謎にぞ囚れしエギボスは、  
 ああ、雨は彼の心の血のしづくかと、  
 今、澤一の若き瞳はかがやきぬ。

In meiner Heimat steht ein  
 Baum, den liebe ich, der steht  
 Sehr stolz mitten im  
 Mittelholz. Da träumte ich  
 manchen Jungen Traum;  
 er wurzelt tief, der hohe Baum.

—Dehmel.

楠の梢

青き涙は金の盃をもちて、  
 わが窓にふりそそぐころ、  
 詩人のペンはクビトの矢のごとく、  
 その思はその翼にぞ似て、  
 限なき自然の魂をたづぬ。

ああ、夏の夜のわが窓には、  
 浮びぬ楠の黛の悲き梢、  
 そはこんもりと萬有の終の快樂にて、  
 永遠の黙の苦き夢の姿なり、  
 月は照るその梢をめぐる煙のヴェールに。

淋さは星影を呑む月の光よ、  
 大空ははつけく睡魔ぞまうて、



あなおぞましや地獄の林檎、  
落つかと見えて月は中有に迷ふ。  
クリストは眠りて矛盾は渾沌を闢く。

斯くてデカデンテ、斯くてデカデンテ、  
更くる夜の死の鐘の音を聞いて、  
楠の葉の梢に白き十字架を現れ、  
君が浮き名をバツカアナルとはしるし、  
今し消えゆく、ああ、若き日は來らんとす。

されど、わが老いたる灰色の髪は、  
悪業のうとまじき光に榮えて、  
愁ひふす、雲の若姫の姿と共に、  
あらゆる星の、はたと黙したる空の、

必然の墓へはこぼれてゆく面白さ。

ああ、運命よ。ばらの花蔭に、  
あえぎつつ、うちほほえむヴェエヌスの、  
なめ石の優肩に、瑪瑙の乳房に、  
君が口吻の、君が手の指の、  
黒き、けがれし紋章は長く、長く残らむ。

九品寺の灯あはし春の霽。

南地北地夢に一聲杜鵑。

漢も楚も戀争や虞美人草、



くるくると水車かな浮世かな。

ゆきつ戻りつ漕ぐ手拱き梶枕  
満千の戀のしほのまにまに。

逆さ不二ながめて歌をよむならば、  
朝日に匂ふ山櫻かな。

磯節をききなれてより春日和、  
濱のをなごも赤ゆもじかな。

### 自然と吾

自然の赤兒の瞳は、  
青く、深く、海のごと、空のごと、

待合は夏の宵ながら、  
蚊はわめき、月は泣く。

すさびたるコールよ、  
公園の闇はゆらぎて、  
葉はわらふ、露はむるる、  
女なれば——灯の精は赤し、赤し。

玉じきの夢のほこらよ、  
わが妻は淫賣のミュージズにて、  
丸き胸にとがれる桃の實、  
あざれなむ梅雨晴の今ごろは。

快樂は長し、生は短し、



星は雲の酒に酔うて、  
眠るごとく消えうせぬ、  
三味の音は墓地の鬺骸の耳にかよふ。

Ein Spisy zu sein, das wünscht/ ich wohl! —  
Getzt Rüssen wir fürwahr  
Reih um euch Mädchen — do, mi, sol —  
Herr Mond bon soir. — Verlaine —

### 呂 清

Mystischer Symbol!  
Geheimnisvollste Augen!

.....

偶像狂が酔ひどれて、

叫んだあの眼、あの瞳、  
つぶらに開いてぼつかりと、  
つぶらに開いてぼつかりと、  
死んだ呂清の魂の宿。

呂清は物を云はなんだ、  
色情狂の雨やどり、  
お神樂藝妓が傘をかす、  
浮氣稼業の待合娘、  
六つ頃は六度の近眼、  
七つ三度のあきめくら、  
呂清は物を云はなんだ。

ことしや二十七、あなたよか、



三つ年長、さんさ千鳥の泣き聲も、  
 聞いた夜船に流のこころ、  
 けしの實ほどの乳房もやせて、  
 男か女かなんちやい性は、  
 それ聞かんすな、十三、七つのお月様、  
 そんちよ、そこらに居ない筈。

死んだ呂清がにくらしい、  
 死んだか、死んだか、のう、なせ、死んだ。  
 そちが情でこのうき涙、  
 もえて、たぎつて、血と湧いて、  
 そちが心に入りさへすれば、  
 病もとんなほらうものを、  
 つれなや呂清、なせ死んだ、

死んだ呂清がうらめしい。

寂滅と紫の夜の鐘の音、

おのろけの詮議やあつし涼船、

あの村の火は石油か菜種かや、

金星がしんみり光る世紀末。

きえがての火影のもとに三味線と、  
 君が髑髏とわが詩とはあり。

ゆづり葉のそよぐ夕や夏すずし、



星の光の雨とそそぎて。

### 歌澤寅之助

幻の星は死の空にもえ、  
榮えしわが世は音楽の、  
永遠の眞理の沈黙に、  
咀はれて遣る瀬なき性慾の、  
悪の川、どくだみの葉の、  
青臭き汁よりも濃く、  
一頃を、夢の夜をながるる。

ああ、終り、楽しき終り、  
ベシミスチツシユな若き勝利、  
嬉し野のすみれとか萱とか、

ああ、春秋すらも心得ぬ、  
牢獄の、天なく地なく、  
ただ涙は心臓の血をひやす、  
冷し病の薬かや、かの歌澤寅之助。

灰色の風は唇をなめて、  
猫の眼のごとき自然の目醒、  
そは星の青き、青き、コール、  
リスボンの町の死の灯は、  
この時、夢の歴史を語る。

歴史は厭よ、殺人の、死の、  
尊き犠牲の野原なれば、  
卑き奇蹟の回想なれば、



ただ、ただ、歌澤寅之助のみ、  
歴史の後のかすかなる香なり。

ローレルの茂樹のかげの、  
庭の噴上のいぶきに、わが、  
ぬれし思をあらひつつ、  
冷えてゆく心臓のモノロークを、  
ただ歌澤寅之助は聞く。

### 再び歌澤寅之助

わが詩は永劫よ、絶望よ。  
女をころす法の刀なれば、  
罪もなき珍丁華、花一輪の、  
命とも、なせ、なせに、

笑ひ、そぞめき、へつらひ口説く、  
物皆、歌の爲に、歌の爲に、  
ああ、されど、その、ほほえみの、  
深き浪底にはわかれてふ、  
赤兒の魂切るこえあるを、  
再び、歌澤寅之助、再び、  
ああ、再び、歌澤寅之助、

### 風

星ふきちらす、  
雨よこぶりす、  
灰色のなげき、青の沈黙、  
木はいかる、葉はうらむ、  
露は泣く、



火は死ぬ。  
大風は 曉のころより。

入梅の梅の金の實、  
千草の赤き花、

雨はよこぶります、  
生の轉化よ、惡の歡樂よ、  
徹の匂ひは壁をはうて、  
蜘蛛の巢は空に舞ふ。

枳殻の枝はちぎれ、  
小松が幹は折れて、  
ああ、ああ、橄欖の青葉は婆娑と、  
根こそぎ倒れ、星さえぬ、

かくて新しき日は來れり。

風ふきやまず、  
明き光、白き幻、  
血のかたまりの溶けたる如き水溜、  
犬の傷負へる足のどろ、  
街燈はへし折れて溝に落つ。  
つゆ時の嵐、夏のめざめ、  
赤き、赤き、もだえ、  
牧場は春を忘れ蓑、  
妻は戀を忘れ衣、  
蓑青く、黒くこんもりと、やんわりと、  
衣は白く軽く、ふつくらとしつとりと、  
あれあれ乳房が見える、



他人の肉慾の犠牲と、  
風はふく、風はふく、  
裾を、肩を。

たえまなき風の勝利、  
物賣る店のラツパの音、

ふるへて、なびく、  
生活の糸の、

夢のごとく空気にゆらぐ、

今夜か、あすか、

晴れよ、静まれ、心と共に、

煙草のけむり、のどかなるわが文机、

嵐はペンと共に青くかすれて、

すぎ去りぬ。

### 可愛い赤兒

二度の夢、三度の夢と、

戀の積つて胸の狂ひ火に、

鬼の姿がうつつた頃にや、

ほんに可愛い赤兒が出来たわいなあ。

Wer hier nicht lachen Kann,

Soll hier nicht lesen!

Denn, lacht er nicht, packt ihn

“das böse Wesen.” — Nietzsche

### 夜

燃ゆる火蔭は硝子戸ごしに、



三  
薊の花が銀の滴に彩られ、  
柔げにすごとく、女の魂のごとく、  
輝く——ああ夜の物思の街。

星の涙は木の葉に落ちて、  
螢とぶかと六月の小川の静の夢、  
闇がしきりと泣く蚯蚓のつれ弾で、  
さびし、さびし、あの街はづれ。

初百合の濃き怨みとばかり、  
ほのかな幻の白きほほえみは、  
消えよ、消えよ、寺の鐘の音、  
とぼうんと流に落ちる頃。

誰も見ぬ——あの七不思議、  
今ぢや十不思議、百萬不思議、  
若き腫とルビーの指環、  
つかれし後の眼にのこる。

夜はつづく。黒う黒う、まっ黒く、  
かぎりなき戀の葬式のごとく、  
人、われ、木立、影より軽く、  
時の花環をささげてゆくよ。

Der tiefe Brunnen weiss es wohl,  
Einst waren alle tief und stumm,  
und alle wussten drum.



Wie Zauberworte, nachgelallt.

Und nicht begriffen in den Grund,

So geht es jetzt von Mund zu Mund.

—Hof mannshai.

### 乞食

姫松の匂へる松脂は、  
続をやく燐の煙のごとく、  
青竹の火に破るるごとく、  
若き春の日にとけて、  
黄の涙とふりそそぐ。

モスリン會社の古い煙突より、  
立ちのぼる、幻の一團は、

遠き村里の黛のうちに落ちて、  
春はゆつたりと自然の胎を出でぬ。

盲目の乞食三人、  
くすぼけた額の柔な皺を、  
近き小川の水でのばしつつ、  
百二十五まで生きんと契りぬ。

今し松蔭に三人は、  
光れる松明をあさりつつ、  
日暮に雁の聲きいて、  
けふで百二十五度の鳴く音ぞ、  
あすが壽命ぢや、松明は入らぬ。



Nimmer umschliesst ein

Schluss die vollkommene Wahrheit,

Ärmliches Stückwerk ist jede Erfahrung:

Wissen ist nur eine Sphinx, die dir

nimmer mit Klarheit reichet des

Rätselworts Offenbarung. —Béranger.

### 豊竹呂清

薔薇の蒼き葉の光、

朝露のあせゆく香、

とまれ、永遠の花の饒舌よ、

姿は金色の日と共に消ゆるも。

君は褪めざる夢のシンボルにて、

遠海の心、浪のなげきのごとく、

ただ寂漠と安閑と春のひと夜の、

若き星の光に酔はんとするを。

薄墨色の統にも似たるその髪は、

木苺の甘き實にも似たるその唇は、

深き遊戯にふけりたるわれらの、

魂の衣と魂の食物とこそ知れ。

### 夜のメランコリイ

金のしづくのポタリポタリと、

落つるかとおと音のなき夜、

わが吐息のほの白き影は、

月光にてらされて、幻の花ともなれや。



しぬびあるく足音のリズムに、  
 しづかに魂はふるへつつ、今、  
 赤き病は盗人の密語のごとく、  
 若き命を奪はんとす。

月死にぬと——葉のヅキオロン、  
 うすぐらき闇にぞひびく、  
 自然はふかく眠らんとて、  
 わが詩の美しき酒にぞ酔ふ。

音のなき夜のメランコリイ、  
 赤き病はわが魂をおそひ、  
 葉のヅキオロンを遠く近く、

金のしづくのポタリポタリ。

Unser Selbstbewusstsein hat  
 nicht den Raum, sondern allein  
 die Geit zu Form: deshalb geht

unser Denken nicht, wie unser  
 Anschau, nach drei Dimensionen  
 vor sich, sondern bloss nach einer,  
 also auf einer Linie, ohne Breite  
 und Tiefe. Hieraus entspringt  
 die grösste der wesentlichen  
 Unvollkommenheiten unsers Intellekts

—Schopenhauer.



## 顔朝の花

若き<sup>わか</sup>悲<sup>かな</sup>みの蔓<sup>つる</sup>よ、青<sup>あを</sup>く、  
ヴェーヌスの髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>か、はた、  
その細<sup>ほ</sup>長<sup>なが</sup>き小指<sup>こゆび</sup>のごとく、  
まがきに匍<sup>は</sup>ひまつはるあどけなさ。

まろらかな甘<sup>あま</sup>き朝露<sup>あさつゆ</sup>の、  
かりそめの命<sup>いのち</sup>をしづ心<sup>こころ</sup>なく、  
やさしき花<sup>はな</sup>瓣<sup>びら</sup>の表<sup>おもて</sup>にささえ、  
めさめたる朝顔<sup>あさがお</sup>の花<sup>はな</sup>の不安<sup>ふあん</sup>よ。

時<sup>とき</sup>は金色<sup>こんじき</sup>の光<sup>ひかり</sup>と風<sup>かぜ</sup>とを、  
さあれ自然<sup>しぜん</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>のごとき愛<sup>あい</sup>は、

嵐<sup>あらし</sup>となりて、汝<sup>なんぢ</sup>を咀<sup>のろ</sup>はんとするか、  
今<sup>いま</sup>、八月<sup>くわつ</sup>の日<sup>ひ</sup>の午前<sup>ごぜん</sup>にこそ。

蛇<sup>あひ</sup>の、うるほへるうすき翅<sup>はね</sup>が、  
二つ、三つ、四つ、飛<sup>と</sup>びちごふ様<sup>さま</sup>は、  
賣<sup>ばい</sup>婦<sup>いん</sup>の狂<sup>きやう</sup>女<sup>にょ</sup>が灯<sup>とう</sup>のかげにて、  
十<sup>じ</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>を切<sup>き</sup>る姿<sup>すがた</sup>にも似<sup>に</sup>たるかな。

“O Wolfram, der du also sangst.”

“Weh mir Unglücksel'gen!”

“Hör an, Wolfram, hör an!”

“Hast du so böse Lust geteilt!”

—Wagner.

“Durch Gottes Sieg ist nun dein Leben mein.”



信仰の灯あはし春の露

蝙蝠の翼なつかしくして聖者かな。

浅草の淫賣宿や夏の月、

賣女とて金では買へぬ女かな。

鳥さしの笛にこの世の情を聞け。

蜩のこゑに楚國の猿思ふ。

流れゆく人やお船や月の影。

隅田川われとなさけをくらぶれば、  
にごりこそせね瀬のいやあさき。

曾思佳人無買春錢追憶當時即有詩

美光浅草貧家娘、  
尤是无情花已落、  
名曲一聲夢百場、  
何妨好色使人狂。

又  
春閨曉夢驚胡蝶、  
一旦悲觀迷女樂、  
醒聽落花帶鳥聲、  
江湖當笑吾生名。

又  
山花映處東流水、  
擁月碎波李太白、  
人稱風光尤自然、  
詩狂殘夢賣琴錢。



又

眼看風物入涼洲、  
從是三千六百日、

明月蘆花玉海流、  
清輝照魄只魄々。

又

古渡江頭一夕愁、  
風光迎月千秋夜、

白楊樹下佳人舟、  
忘却往時兔笑不。

木 苺

樺色のうみたる木苺の實の、  
甘きすゆき夢のごとき味は、  
わが舌の音楽のメロダイ……とろけて、  
悪の國の闇へとしたたり落つ。

こころよき五月の金色よ、

風は香ひぬ。汀ぞ白くほゝえみて、  
紅色の花にくち付けし時、  
人生は遠いエンゲルの笛の音の中に。

苺の不可思議のかほりが、  
唇をぬらす感觸には、  
むかし分れし最愛の女と、  
抱擁のかの快き眠ぞ味はる。

柔絹の銀の光のごときその指、  
指環のルビーは電燈に噎び狂ひて、  
戀の、悪魔の——、もぎとられたる、  
木苺の實よりは小さかりしが。



In deinen Augen träumt ein Licht,  
 Ein frommes Licht aus fernen Weiten;  
 Und doch ist es die Sonne nicht,  
 In die sich stolze Däfte breiten.

Ich kenn' den Tag, da es erwacht,  
 Ich sah sein Leuchten nie bei andern  
 Und weiss: bin ich in tiefster Nacht,  
 Werd' ich nach diesem Lichte wandern.

—M. Geissler.

## 海

薊の汁をながす 曙の海、  
 浪は銀の灯、赤き怨み、

すすりなく女をんなの魂たましひのごとく、  
 つめたき沙すなの、岩いはの、私わたしの、  
 フイロヅファイを咀のろひつつ、  
 打ちよする、永遠えいゑんの恐怖きやうふよ。

舟ふねぞゆき帆はぞとぶさまは、  
 祝福しゆくふくの盃さかづくが美うつくしき雲くもの、  
 酒さけをただへつついつとなく、  
 奈落ならくなる若わかきわが戀人こひびとの、  
 夢ゆめをあたたむるかと思おもはれて、  
 愁うれひは瑠璃るりの翼つばさとなりて舟ふねを追おふ。

松まつが枝えのかげなす島しまが根ねを、  
 ヒタヒタとあらう白しろきものは、



死にたる妻の爪弾かそれ、  
聲のきこえる節、節のあはれ、  
青き單衣の袖ゆらゆらと、  
紺繻子のなつかしき、皺——影。

わが妻は蠣を好しよ、  
青き酸にしづむ可愛き蠣を、  
わが妻はおよぎを好しよ、  
夏の日の冷き泳ぎを、  
妬ましく、されど、甘き海こそ、  
わが妻の黒髪と乳房を弄びたれ。

### 月光

サムボルの泉かや、その、あはき光は、

流れて空気の青き統にしみ、  
ねむれる葉に悲しき夢をおくり、  
くらき木影の夜の涙をかざる。

眞珠のこころよき、愛の影——  
祝福の灯びのまろき熟睡よ、  
消えがてにのこる銀色の雲は、  
白く、白く軽くほゝえむ。

天地の渾沌と淨寂と、  
瞑目と覺醒とを、  
おしながしゆく時のつなみを、  
ひそやかにわが心は感ず。



ぬくもれる五月の平和よ、  
ひとりあゆむ生命の響をきけ、  
今、三毛猫の美しき眼は、  
悪の花のごとく、星のごとく、  
吾をにらむ。

### 復活祭の夜の悲哀

かつて、この世の幸の泉なりし、  
わが妻の、若き瞳はそれよ、  
黒き憂愁のうちに輝やく星、  
星は燦たる歡樂の寺の紋章よ。

あはれ、汝の母は墓場に、  
けしの露に、あこがれの雲に、

永遠の汝の影を秘めたるに、  
嵐は吹き來りぬ。陰府より戀の世に。

そは復活祭の青き夜、  
マリアの饒舌を聞きたりしに、  
燭の涙、限りなき神秘の川と流れ、  
新なる洗禮を受けよ、世の終りにと。

世の終りの裸體の男女は、  
火の髪、焰の四肢をもて、  
歡樂の寺の廣間に踊り——  
あやしき地球儀を取り圍みぬ。

星一閃、幻は消えうせて、



くらぎ、くらぎ憂愁は、  
僧侶の法衣のごとく嚴に……  
こよひぞ、わが妻は死したりしなり。

### 夕暮の紫

紫のほのかなる饒舌は、  
夕暮の無言の悲哀を説き、  
入る日の、つつがなき、まどろみを暗示す、  
雲、雲よ、永遠の時の、戀人よ。

近き森の黒き挨拶。

あはれその梢は金の環をめぐらし、  
晝と夜との快き別れは、  
風の、葉の、露の——パンの合奏よ。

遠き教會の塔の十字架、  
明星の若き光に榮えて、  
世の末の宗旨の力、尙、  
このシムボルの美にこもるとばかり。

あゝ沈み去る日の嚴肅よ、  
わが吐息は星の光にもつれ、  
わが魂は悪の絃にふれて、  
しづかに天女の讚美歌を導く。

### 森鷗外君に與ふ

青き、青き滴り……  
陰のほのかなる、生のこころよき、  
月光は心のオルケヌトラを弔ひ、



病めるムーゼの唇を照す。

青き、青き滴り……

夢の時雨の後なる葡萄の葉蔭、

石像のヴェーヌと洋畫のクビトの默契ぞ、韻律なきわが國詩の若き悲哀よ。

ダンヌンチオのリヅム面白き言語さへ、

表白の不完全なる車とし聞けば、

あゝ、言の葉の國の祖先教——その祖先の神の酒、神のパンをば盗みたるからは、  
かれが心の食物は只今地獄の浪の上にのみ。

わが宗教なるわが詩は、

最後の床に苦しみしノヴァリスの、

熱——狂はへる胸の動悸のごとく——

いつの世か吾を救はんとする、

日出る國よ、否、コルヒスは晝も亦夜。

註 The words are imperfect vehicles of the expression.——D. Annuzio

ダナイデン王神饌に倍食して、その食物美酒を盗みて近親にあたふ。神々怒りて王  
を地獄に落とす。王飢ゆること甚し、波上に林檎あり、食せんとするに風枝を拂ひ、  
浪王を阻めて、遂に永劫の苦患に會ふ。(希臘神話)

コルヒス。ギリシアを遠く去る一孤島、四時凡て暗黒、魔女惡鬼、群れつどいて呪  
咀を事とし、魔女メデアはギリシアに來つて佳人の琴を折りしと云ふ。

### 暮れ方の東京市

闇のまどろみ——葉風の絃の、

つかれたる甘き調は——遠海の、

渚のローマンスいつしかも、

わが夢——古き詩のリズムなりしが。



花の四月のなやみ——ぬくもる空風は、  
ほろ酔へるヴェーヌス嘆息の如く、  
青白き夕露の底に、  
赤き唇はふるへつつしぼむ。

軒提灯、黒い木造の平屋立  
エキゾスチツシユの若き愁いの、  
詫びて住む幽霊の都の音楽は、  
八幡の鐘の音と電車の響きよ。

獨

莊嚴銀の！花の、  
夕暮のほのかなる光よ、  
永遠はねむれり、この時、

雲間に小鳥の讚美歌。

私——影の愁ひより、無より、  
生れ出で舊教の寺院の、  
柱像の聖母に、赤き、  
赤き花環を——あゝ、謀叛人。

橄欖の陰もる月光は、  
青き蛇のごとく聖像を匂ひ、  
その赤き、赤き花は、マリアの、  
細指の指環のルビー、

あゝ、さびし——さびしき、  
謀叛よ、胸なる戀のヴェキオロン、



赤兒の泣くごとく——そはクビトの、否、  
バイブルを持つことの手は今しふるへぬ。

### 雨

ふけてゆく夜の春雨に、  
夢のくれないはさめて、  
しとしとと悲き花はうなだる、  
ベシミストの限りなき快樂よ。

過去は彼の戀人にして、  
刹那は悲き誇りなり、  
なみだは暗き世界をうるほし、  
かの戀の墓穴にそそぐ、  
葉風は灰色の空気をふくよ。

あばら屋の軒の愁ひを、  
冷く照す月影も、  
永遠の雲のたわむれに、  
消えうせてこの一夜や、  
ああ、雨はヴェーヌスの心のしづく。  
ぬれたる枝の、とけたる土の、  
甘き眠りよ、ぼたりぼたり……、  
ほのかなる淫慾のシンフォニーと、  
わが胸の動悸のメロダイとは、  
女浪男浪の神秘の合奏よ、

### 雲

松明の白き焔は、



ヴェーヌスの瞳の光よ、  
いざ金の戸をおし開て、  
影の世の女とあそばん、  
しづかにわが詩をうたひつつ……

あこがれの象徴よ、あはれ女の、  
蛇のごとき黒髪をつかねて、  
桂冠は青く、額なる星こそは、  
アポローが與へたる巫女の守りか、  
縦琴はふるへつつ鳴り響く。

甘き死と悲しき眠りと、  
灰色の狼と紅の月と、  
咀れし世の遊戯を忘れて、

來りし吾は桂冠をすてて、  
驢馬の假面をかぶらむ。

うすぐらき山の奥がよ、  
いま、松明は消えたり、  
焔の幻は夕風にふかれて、  
裸體の女の湯巻のごとく、  
空にたなびきて星をつつみぬ。

### 新宿の朝の歸路

十二の天女素裸の暖舞、  
あけ方の星のオルケストラは、  
ヅキオロンの病める顫音の、  
ほのかに、ほのかに消ゆるごとく、



紫の雲にかくれぬ。

パンのかくれがはこんもりと、  
四谷見附の外にあらはれる、  
ナヤードのさめざる夢を、  
うごかぬ堀の浮草はまもる、  
茜と銀の朝の装飾よ。

淫賣のミュージゼと夜の、  
悪の花かげ苗香の、  
ほのにほひ、びやくだんの、  
あをき吐息のむるる部屋にて、  
あそびたる吾の回想よ。

幻影は黒き泉と化し、  
亡びたる神秘の谷に湧く、  
その刹那の若き暗示：  
未来の海の春の浪は、  
恰も賣女の顔の微笑のごとし。

うすみどり

うすみどり春のいぶきや、  
旭は紅の香を吐きて、  
さくら蔭、花のなやみは、  
つゆしぐれおぼろの苔地を、  
たゆげの眉をけふらせて、  
ひとみには神秘の夢くゆる、  
うらぶれ心地、さまよふところ。



ききたれば、うれしや、  
われも戀あこがれてとめみれば、  
オリイブかほる木茂みに、  
寒水石のヴェーヌスが、  
口と乳房に朝露を、  
ほんのりあかくやどらせて、  
素知らぬ顔にたち居たり。

自然

涙は花の顔を、  
赤き愁は黒きかげを、  
そよぐ、うら葉や、  
幻妖の怨みぞながき。

とはす語りの春の人、  
自然は力、世は神秘。  
パンの緑の言の葉は、  
黙の乙女や聞きつらむ。

「死」の曲こそはヴェーヌスの、  
山の木蔭の谷川が、  
すむもにごるも漣の、  
暗示の楽譜今もかなづれ。

愛の端歌はうぐひすの、  
さくらを口説く手管にて、  
アポロの宮のおらさるむ、  
可愛い巫女の口づたへ。



空の青衣、雲の翼、  
夢の天使の口笛に、  
ねむる茜や野の草は、  
胡蝶の情男をまつならむ。

悪は無象の火の影や、  
悪は有象の土の精、  
自然の鏡に映るもの、  
物皆きえて吾ひとり。

### 竹本美光

あはれなほ、心の灰に、火の闇に、  
のこるかや、うす紅の、白銀の、

永劫の、悪の匂か、夢の胞に、  
はらめる子、あかごよ、魂よ、うらぶれて、  
夜ごとにさむる、かなしみのこゑ。

やよ、美光、三味の音の色、慾の撥、  
魂搔の、あかきしじまを、賣淫の、  
はたムーゼ、ばらの調か、けしの曲、  
ほそながき、怨言もつるる、縁の絃、  
十年ぞなれば喉を絞りぬ。

### 敵

世は敵よ、  
火は敵よ、  
吾、吾の敵よ、



なべての悪魔の舌の根を、  
たつべき劔、手にもちて、  
生の勝利にあこがれむ、  
徳の怨みをはらしなむ、  
見よ、永遠は燭の底に、  
燃えざるシユフィンクス、はたや  
杯の湖におぼれぬバツカアナル、  
悪の胃、悪の唇のごとく、  
静かに黙示す、……死を、  
汝の母を……マーテル・ドロローザ、  
花環をかほるわが室の、  
床の間にこそかざられて、  
幻はうなぎりのごとく消え去る。

怨み

火の胞をぞ時はゆく、  
永久の秘密の、はたや、  
狂へる刹那のなべて、  
うれしき過去の思ひ出よ。

苦みよ、慾よ、微笑よ。  
蛇のごと草野を匍うて、  
春日和、眠る羊の、  
心臓を刺す勝利かな。

クビトの白矢、吾も  
君も、戀の男は、



分け取りて火の胎を、  
西へ東へ走る苦み。

彼の女の額悪の傷、  
観世音、眉間の、  
信の光る輪か、否、  
矢の行衛よ、的の直中。

獨生きたら、世界も生きた

濁り江の樺色の月、  
水は動ず、春は青し、  
亂杭の小舟の黒い影、  
夜は死んだよ。いつしかも。

ひとり行く、この身は、  
生あるものなべてぞと、  
ためらいで、ふつと、あえぐに、  
月はカラカラ笑つてゆらぐ、  
時もあれ風はそよ風。

悲み

いつまでも、  
名残を憂しと云はせじよ、  
けふも早暮れたり、  
金色の雲遠空は、  
悪の夢かがやき、  
白妙の君が薰衣の、  
そびらには 鵬の翼ひろがる。



天使の笛の音、  
 ローマの古寺の鐘、  
 紫さゆれ飛ぶ火も見えね、  
 搖籃の赤兒の額、  
 明星もこそ匂へ、  
 今、君、とびぬ西のいやはて。

運命の春はうれたげに、  
 饒舌は霞の、  
 きえ沈むなやみを、  
 つぐるか二十五絃の、  
 星の世のコール、  
 君もまたああさなり、

青き光にその幻……

影畫の力、秘密の絃に、  
 ひかさるる吾が思かや、  
 身もあらず、地のおはり、  
 魔の岩かげの銀の花、  
 海はほほえむ、こは、  
 グリシアか、いづこそぞ、  
 くらげ漂ふ鱗の光、  
 レアンダア・サツフオーの、  
 戀の魂、流れ流るる。

狂女

長き日を、



ほほえみくらす、  
狂女のころ、  
うす紫の世界のゆめの、  
ゆらぐ木枕に、  
片腕かけて空をながむる。

春は酒かや、  
妾の命ぞくゆる、あれあれ、  
十日市、ともす軒端の、  
燭の影、これ逃げさんす、  
追ひかけ足のよろめけば、  
園の梨の木、花一重、  
ひらひらひらと肩の上。

ふしうつむけは、  
春日和、かげらうの、  
もゆる障子に三味線の、  
頭巾かぶりし立て姿、  
あら花魁の、櫛笄か、  
勝山鬘の影おぼろ、  
憎しと樟子ひきさけば、  
倒れかかるは古き音よ、  
紀念の絃のそらなりよ。

三筋町、窓の噂を道の上、  
きさつるわれの、片思ひ、  
はかなや紙の白洲にて、  
戀のしらべのおごそかに、



悪魔がのぶる始終こそ、  
わが詩のあやよ。

### 戀の殻

露ふくむ、たわいな、若葉の、  
青白い眠りを、仄に搔立つ、  
うす紫のけぶりの糸のいたいな纏れ……  
醉へる花の、たわむれの喰ぎ……  
戀のまさ夢の解けて絆れし述懐

狂女の媚めく仇笑、  
温風の闇を煽りて、  
焰の花弁、蓋の光の、  
ゆらぎを染める香の雫に、

氣遠げに、酔ひ沈む夜の――  
烏羽玉の肌さわり、柔な、  
なよびかな、花の戀の悪戯。

其の蒸るる木蔭れの、  
赤き魂のさゝやきを、  
わびしらに、嘆き聴く、  
若き身の、吾が青の影。

月魄に兎もすれば消えむとする、  
戀の殻、幻の裳裙に包み、  
胸なる悲哀の銀の糸、  
ひそやかに、ひそやかに、  
花びらの片搖に鳴り響く。



静寂の夜を、  
闇にこたゆる覚音を恐れ、  
獨を心の城に閉ぢ籠めて、  
何時までか、亡靈の残り香を、  
嗅ぎ惑ひ、戀の殻をば温めむとする。

### 世の始と世のおはり

青空に秘密がねむる、  
夢の池を白い薔薇がのぞく、  
小鳥が金のつばさをひろげて、  
魂のねぐらをにげてゆく、  
そして日まわりの花が、  
東から、西へむく、

明星が揺かこの赤兒の、  
黒い瞳のなかにもえる、  
世の始で世の終の夕。

### 四月の緑な夜

四月の朧な朧なる夜、  
眠つた花の赤い吐息が、  
露ばんだ重い空気を染めて、  
静やかな月の光を揺する、  
大川の涯。

長い石垣の、白い土藏の、  
投影をひたす黒い浪の脊を、  
すべりゆく滑な瑪瑙の香。



夜の静けさを、  
川浪が月影を抱いて、  
絶え間ない幻の戀の饒舌……  
闇は顫へる。

### 獨なる吾

微あかく黄ばめる夜の、  
うす濁る柔い空の胸に、  
うなだれた星の弱い吐息。  
緑のあたゝかい密語に、  
露じめる五月の夜を、  
妬たげにうちまもる星は、

歡樂の悲哀に夢の枕を、  
奪はれた女の眉目に似て、  
たゆげにうち薫る。

悲哀の杯に映し入る星の影に、  
吾が過去の消えざる夢の紋章を、  
泛べつゝ新しき悲哀に酔ふ、  
獨なる吾は……

### 一九〇九年の其の晩

私は……  
日誌をくり擴げて夢の歴史を讀みながら、  
記憶の畫像のうす紅い唇を、  
逃げてゆく甘いキス……



紀元一九〇九年の其の晩を思ひ出す。

夢でしやうか、

え、夢、おかしいわ。

夢でしやう、

でも善いの。

今夜がお別れ、

嘘。

いえ、今夜が、

.....

青い朝が来ると、

女の黒い瞳が濡れて赤い唇が顫へる。

家を出ると野路は白い、白い破ほこり、

麗な柔い光に旅の脚が浮かぶ。

私は.....

歸る、女は歸らない——

村を一里、常陸の國の戀瀬川に身を投げてより——

紀念の絹衣を枕に夜の床に泣きながら眠る、

今年の其の晩.....

灰白い夢の夜を灰色の鳥がとぶ。

### 無題

本能の鞭あげて、

墓石うてば、

骸骨おどり、甦り、

うれしと吾に手を合す、



舊日本の亡者ばら、  
やをやお七も其のうちに、  
やをやお七も其のうちに。

### 紫

心はむらさき——火のむくろ、  
戸帳絹おしまわし、  
はづかしき身をかくさんと思ひしが、  
力なく、十字の刑を負はされて、  
ボードレールぞ笑ふなる。

罪とは戀の償よ、  
盃にゆらく火の酒、  
魂うかび、狂ほひて、

身は一つ、病心地なる。

春くれぬ、若き夜の、  
香ぞあはし、うすもやの、  
腫かすめて流るれば、  
生のうづ潮濁るなれ。

疲れたる一間のなげき、  
燭の火のまじろぎ、  
笑ひぬ、物はなべて、  
われ黙するに。

### 秋の夕日

赤煉瓦に夕日の光、



秋の黄ろき痛み、  
ふきおこる辻風の、  
ほこりの煙に空氣はむせぶ。

遠空の藍は衰へ、  
雲こそ、無事に、  
死の秘密をまもれ、  
われ立ちどまる時。

### 秋の聲

陰忍な、謀反氣な、  
紅皿の汚水の、  
ふつつつと火照に喘ぐ、  
毒血の爛れたる色にも似たる、

若き悪魔の火の唇よ。

亂れ齒のやすりを吐きて、  
死の夜風、灰色の雨を吹く、  
黄枯葉の疫病の愛の野に、  
轉び臥す死臑を咬む……秋の聲。

裏庭に、  
母木の乳を吸ひ枯す無花果が、  
夕日蔭、生にあぐみて、  
紫にあざれ落つ——愁の響。

### 夢の光

薄靄を突いて、煙を吹いて、



仄見える臙な、臙な光——心の赤兒……  
夢の女の乳房から遁れて、  
悲哀の襦袢の底を離れて、  
心の赤兒……箭の如く、神の如く、  
どこへ飛ぶ。

搖籃へも歸らねば十字架へも行かぬ。  
流星の如く消えもせぬ心の赤兒……  
箭の如く、神の如く、  
運命の闇を悲哀の世界へとぶ。

### お七の幻の暗示

暗闇にふと浮きあがる花の模様のお七の小袖……  
幻の光の玉を揺りながら吹き撒らす……

女の精のあるたけを舞ふよ、飛ぶよ、胡蝶の如く。

月からこぼれる光の雫で、拭きあげたお七の鏡照すよ、映すよ、戀の化身のお七の姿  
を唯そればかり、いつまでも……

見よ今の世を……  
山には薄紅の乳房の蕾、  
海には白い齒の眞珠。  
山にも海にも女は居る——お七は居らぬ……  
花は咲、戀は咲かない。

偽善の斧の柄が腐つて、戀の碁の勝つた利那闇にしたたり響く……赤い音楽の顫へる  
熱調を聞きすましながら物言はぬお七の幻、



蠟の火柱 燃え殻の青濕める夜の胎に仄香ふ白い顔のお七よ。  
紅の香のなほ残る唇に微笑を見せながら消えて行く闇の戸から洩れ響くかすかなる  
音楽の青い顫へ……  
みだれ咲く Mandaragora 戀の實はならぬと……

### 戀の暗闘

光と暗示と戀の暗闘、

君は神の死にがらを見つめ、

われは悪魔の紋を忍がく、

さりながら世は平和なり。

平和なり、さればこそ、

君は三絃の糸になげき、

吾は詩と金にくるしむ。なれども、

戀の占星こよひも燃ゆる。

生あり、死なき戀の世は、

失意をかこつ若うどに、

神ぞ與ふる美き酒の、

「自殺」の香あまきかな。

戀するも、戀せずと云ふ、

われを見て、君はしも、

ほほえみ、狂ひ、泣き、もだえ、

あの世にゆくぞ可愛けれ。

### 女に與ふ

うむ。



ふつて、ふられて口惜いと、  
馬鹿、馬鹿、馬鹿が、

あつはつはあ……

それが口惜きや、

なせ殺さない、

ねくび位は搔せてやるに。

### 戀のおはり

夢の池の面、

スワンの白き翼の、

ねむれる影は、

いやはつる世界の暗示。

さむる時、

闇は光と輝やく、

酔へる時、

闇は戀人の幻を吐く。

わが筆は、

アウロラの小指なり、

虹を吐く。見よ。

心の空の紋章を。

虹こそは戀の影畫よ、

消ゆれば空は青く、

あらはれて空は黄なり、

黄よ、黄よ、今も又黄よ。



秋と吾

紅葉ちりはて、  
秋は戀人失なひぬ。  
秋はひとりよ今、  
うれしくて、喜ぶ吾は、  
元から獨、獨の勝利。

死ぬ迄縁とうたひしに、  
秋は黄がれて老ひはてぬ、  
かちどぎ揚げむ、今、  
吾は獨よ、われの勝利。

人妻に與ふ

死ぞ笑める、  
君が腫の、  
深井の心に、  
吾が血にあかき、  
悪の華もゆ。

怨 靈

生は火の酒、  
酌みませ、  
飲みませ、  
酔ひませ、  
狂ひませ、  
死にませや。



胸のそころは、  
悪徳の花、  
咲いて、  
萎れて、  
しぼんで、  
ちつて、  
永劫の光の別、

### 夢

存在の殻——  
ひわれた心の地層、  
あらゆる時代の地震の後、  
歴史は空虚のシムボルで、  
戀は一生の出来事だ。

苦しい悶への海に、  
女を見すてて乗り出した、  
私——私、  
その私が昔惚れて、  
今は惚れられた女の膝枕、  
つかれた悲哀と無意味な沈黙に、  
ゆめ現、眠りほけてる。

### ねむの葉の蔭の饒舌

ねむの木の葉蔭に宿る夢の吐息……  
日はおもはゆく、夏は喘ぎぬ、  
汗にじむ額の苦惱……まひる頃、  
心のみいとどつめたき。



かたびらに風をふくみて、  
いつか佇立みぬねむの影、  
幻覺に眼は白み、地をば射る、  
光の彩斑、火のまだら青き紋、  
うつけたる刹那は逝きぬ。

わが胸は病のしとね、  
すゝり泣く魂の熱のもだえよ、  
母となり父となり世の影を、  
避けてかばうる心の稚兒の、  
いやはての吐息を深しけふの晝、  
ねむの葉を洩れて匂へる黄金の滴—  
青白む額に受くる火の烙印、

今よりは肉にのみ生きむか吾は。

### 君は賣女

君故か、

われも亦病みごころ、はては、  
ふしども重しまくら紙、  
けふもはや血ににじみ汗を匂ふ。

御園白粉、乳の香むれて、  
蚊帳の青を透き、  
たゆげにくもる悪の華、

常闇は不安の戸帳ひきまわし、  
さへぎりぬ黄の光を、



ほのに聞く、火盞の底の蠟の脈搏

ふと洩れぬ灯の稻妻、

君が額の夏の富士、

雪融にかほるむく毛の雲、

眼のみづうみは黒波どよみ、

まつげの小松原、まぶたには、

ほのあかき虹ぞかかりぬ。

かかる夢みん爲めに、

うまれこしふたりを、

生木裂く社會の嵐、

血の桎梏、あすの日は別ぞと、

長の長のわかれぞと、

教るか時の鐘　君は賣女。

### 昨日今日

大空をけふ吾かけりぬ。

たまゆらを千里、

雲の夢まどかに深し、

空の息はつかに洩るる、

下界は脳病院の避雷針、

きららかに輝きて、

白塵にそまる空氣の渦は、

にえたぎる血汐だみにこる様とこそ知れ。

安達が原をきのふ吾見ぬ。

藁葺の一家、



ぬれ土の肌はだえに青苔あをこけの柔毛にじけはみだれ、  
 墓はかの埋もれ石草深いしくさふかに、  
 ゆららと燃ゆる燐りんの花、  
 小野小町おののこまちが化身けしんぞと、語かたるらく、  
 現世うつしよに吾われにや及およぶ佳人かじんある、  
 さればこそ詩しもすたれぬれ、  
 榮華えいごわが飾かぎる媿女しごめを「われ」とよび、  
 腦病のうやむ人の痴しれ語ことを詩しとは呼よぶ。

### 世界滅盡

十日………  
 火ひの雨あめは地獄ぢごくの空そらより、  
 五日………  
 青あをき風かぜ死し囚しうの墓はかより。

ひと頃ころを天地てんちの擾亂じようらんし

ただ、けしの花はなのみ……  
 淫婦いんぶの赤あかき素性すじやうをほこりがの、  
 香にほひの醉狂すゐきやう、蓋やぶの黄光くわうくわうの潤うるみ、  
 たゆらなる花くわべん瓣はんの饒舌にやうぜつ、  
 世界せかいの最後さいごに咲さく。

### 野守の心

大方おほかたは野守のもりの心こころなりき……  
 そは、越路こしぢの遠里とほざとの小野おのの灯ともしび、  
 わなわなとふるへ泣なく……  
 渡船場とせんばはこの時とき、  
 たゆらなる水みづの戦あつき……



わら屋にくすぼるる蚊遣の魂の遊戯よ、  
眠るが如く興ざめたるに似て、  
一切の死靈はほほえむ。

山の屍水の夢、

飛ぶ火はきえて、

檻の木の黒衣の法師、

さ夜風に讀經すよ……世の破綻、

血ぞかわく戀の日記を——闇の枕邊、

幻のあんどにかかけ讀む……若き落魄。

### 秘密經

あかしやのそよぎ葉、

ひたぬれしくわの葉、

心の薰衣ぬれ匂ふ雨あがり、

七月の夕榮は、

かけ並ぶ庇の露にがごろひ映り、

和みたる生の光は、

軒ごとに微笑み照りぬ。

斯る夜……

戀なくて誰かは生きむ、

酒なくて誰かは生きむ、

歌なくて誰かは生きむ、

今をしも、吾が戀人は、

席亭の高座に千金の喉を潤し、

語るぞや、かの節のいくたり……



藝術

わたしの詩集の表装を見よ、  
紺地に白羽の鳥、  
罽褸に金の十字、  
母の似顔にサタンの紋、  
それのみ、ただ、それのみ、  
戀のつかれの秋の夜に、  
詩集を世に残し、さつても、  
墓場の夢の安樂さ。

通夜の雨

黒い雨、死の涙、  
空はいま泣く。

夢は潤ひぬるる、  
心の宿に歸りいこふ。

ひとつらに燭の火のきいろさ、  
通夜のかたとき。

旅人

江の邊、青煙る草の熟睡、  
夕榮の面に金星の眉薫り、  
茅屋は軒互に暮れ懊む。

旅愁の影は流に落ちて、  
魂の漂蕩の、



不安の波に揺え動く。

悪魔の宿の一夜を憂しと、  
門出する、最終の心の驛路、  
神秘の國は遠いかな。

萬物は零落の胸に眠り、  
故園は暮靄の裾に隠る、  
翼鳴る五位鷲の、

江の夢を詫びしらに遠翔る、  
抜羽の白の漂へる、  
洲の水は葦間に泣きすすする。

旅人は魔杖を曳きぬ……

草埋もれし鄙の軒下、  
夕顔の一輪よ——魂火の、  
揺るる影の爪白く、  
官能の足疼き初め、幻の旅路、  
追分を、ふと迷ひ入る地獄門……  
神秘の國は遠かりき。

### 虹の影畫

夜の宿に、疲れて休む星の光は、  
夢の廢園に降り灑ぎ、  
沈み逝く萬象の、黒澄める、  
草蔭に泣き顔ふ夏蟲の、  
悲哀に酔へるミクロコスモス、青白み、  
稍灰色の其の空に、薄紅を、



アウロラの小指もて塗り流す、  
赤い虹——吾からの興奮、火酒の刺激に病み狂ふ官能の苛立つ幻覺よ。

夢のサフラン、胸の花壇に培ひし、

昨日の春は散り果てて、

記憶の畫聖、青き血の、

顔料もて畫取りたる百萬の、

戀の巻物、胸庫に密め置き、

青灯の夜にひもどいて、

回想の旨酒に獨醉ふ。

戀路の孤客、過ぎ越しし、

長途の空を振り向けば、

不圖、浮ぶ幻の虹の輪よ、

ほのぼのと薄赤く、  
心の極に消えて行く。

あゝ、生の淺沼、投げ込みし運命の石に、

軽く立つ小波の年の輪の、

揺れ揺れて、碎け飛ぶ戀の占星、

敗亡の吾が過去の姿を憂しと思へども、

尙火酒を浴び、見むとはすらむ、

燃え焦る官能の血狂うて、

闇に彩る赤き虹を。

### みつば姫

(一)

林の白い風が夜を吹き捲くる……



仄烟る樹茂の秘密の窟が開く……  
みつわ姫は曙の鏡に向ふ。

(二二)

兩手の白指に絡む丈長の、  
黒髪を束ねると、ふつと、  
微風に揺るる青空の孤雲の影。

(二三)

啣んだ瑠璃の水櫛の、  
玉滴かき垂れて泉が湧く。

(二四)

しだらなく、引きづる帯を、  
挂げれば、東の空に虹が舞ふ。

(二五)

あゝ、みつわ姫、私は……

姫の愛惜の泉の香油、  
姫の寶の髪雲、  
姫の秘密の帯の虹……  
何もかも見た——姫の姿も……

白い死

縁の焰うるむ夜、  
黙す饒舌の、  
多情な闇の深い眼に、  
影青き燈火の光が籠もる。

木茂みの葉隠を、  
飛びつどふ羽蟻の小群、  
環を書く翅の綾織に、



燃えうつる緑の夢の、  
ふすぼるる夜白い死が眠る。

箭

眩暈の、  
箭は飛ぶ、  
白い夜。  
搖籃の、  
熟睡の都、  
夢の故園へ。

曙

夜一夜、  
息災な森の悪魔の、

何が無しに嘲笑ふ面黒さ、  
冷酷な川の夜叉の、  
洒洒と流れる、し澄まし顔。

星露の女敵と戀争ひに、  
濡れた青葉の重い息、  
一夜の裡に褪せ果てた、  
花の仔細ある俯首れ姿。

桂樹をこぼれる露の魂が、  
地球の夜を誘拐して、  
東雲の鳥の羽風は、  
曙の香を吹き送る。



最後

及に金の血が光る——闇の稻妻、  
燐の海の青い燐光、  
歡樂の犠牲の勝利の謠か浪の音。

雲の樟子に絛の絹すれよ、

月姫はかくれ戸感ふ、

銀の火に悪の風、

邪教のクロス高らかに、

月姫のおはりの命。

浪の讚美歌、

悪魔が岩に蛇の死にから、

時の揺腫きいろく焼けて、  
天地はひと色の灰となる。

鶴の額と女の乳房

血ぞうるむ、

戸帳の絹の絛の花輪に、

悪魔の腫火と燃えて、

十年の秘密は今、

存在の愁とともに消え失せぬ。

ともしびの油煙はむせび、

魔の鳥の青き翼、

夜の黒を透い飛んで、

夢の鏡のひかる底、



地獄の影ぞゆらぐかな。

硫黄の香、悪の煙、

火ほほえみむ——春の暮、

毒の針胸を刺し、

肉に棲む血の脈の、

青また赤き蛇いかる。

ラオコーンの苦き叶び悠久に、

夜の國は女の勝利、

吾燃ゆる、白羽飛ぶ、

毒のシムボル、——マリアの乳房、

人皆は十字架脊負ひて焦れ死ぬ。

けふも、われ丹鳥の、

鶴の額の烙印に、

見惚れて痛く酔ひしれつ、

蝮蛇の腹子取り出し、

どちようを喰へと投げやりぬ、

鶴は一こゑ、舞ひあがり、

まむしは吾の指咬みぬ。

### 尼寺の櫻

夢とろむ春の曙、

霞にかぶ尼寺は、

櫻ちる、こころなく、

されど日脚はおそく、

愁をはこび、西方の、



浄土になげし黒影の、  
 消えずまに尙こがるれど、  
 信の杖、ひくや衣の、  
 けうとくも重ければ、  
 ひとひ、ひとつき、ひととせは、  
 また十返のむかしだも、  
 忘れかねつる幻の、  
 あるかなきかの命をば、  
 惜しとや人の思ふらむ。

花ふぶき軒の嵐は、  
 音すら立てぬ鶯の、  
 聲ものうきは戀ならで、  
 かりそめとこそ聞きつるに、

いつか枕に通へれば、  
 赤き夜のくらき悶の、  
 沈黙をば、守るうき身を、  
 法の牢屋や、うもれ草、  
 クピトが戀のしとねとも、  
 莊子が蝶のやどりとも、  
 なるまじもののいか許、  
 うらみ、つらみの限をば、  
 見あきて暮せ、尼の君、  
 花の心や、袖の風。

死する女へ

火箭飛ぶ、默契の、  
 悪の秘密、



夜は川よ、空氣のはたや、  
自然の吐息、

戀——不可思議よ——神秘よ、  
眠る赤兒、夢、魂切る、  
泣く、ひた泣く、心なく。

厄日の、厄年の、女のいのり……

血は虹よ、花よ、葉よ、心の國の、

愛憎は金銀の光れる鍵、

藏の扉はうらおもて、

同じ形に迷ふ女は、  
生に酔ひ、死に酔ふ。

世界は暮れたり、

極天の使か、はたや、  
悪魔が原の風の荒馬、  
嘶くよ、春の柳に、  
血みどろの三日月かかり、  
戀瀬川——星ねむる時

世界の暮の決闘、

戀とこそ云へ、かりの宿、

ああ、みちか夜の正夢か、

君を殺すか、われ死ぬか、

君の懐劍われが、太刀、

切りむすぶ銀の十字架、

火花の金は闇を射て、  
神のみ姿現はるる。



詩

魔ぞいそぐ谷の小蔭、  
魔ぞあらふ谷の小川、  
葉がくれよ茂木の精は、  
ささやきぬきその悲劇を。

たとしへもなき饒舌の、  
心にはひびけど耳にきこえぬ、  
幻の巷か世界のしじま、  
よそごとと思はば罪ぞ人の子。

それをのみ世のたづき、  
ちから  
力なきおぼろ心の、

光の色の、かげろうの、  
綾どらんとて生れこしもの。

生れざる秘密のみ空、  
光の三絃、雲の撥、  
またも奏れ死の前の、  
祝のうたげいまをしも。

初秋物語

夜の馬、星のたてがみ、ひたはしる。  
白金の夢はこごえて、  
秋はうす霜の衣をかむり、  
音もなく、あけ放れゆく。



アウロラは露句ふ空の海に、  
 しろばらの舟、玉の小櫂もて、  
 曉のなきさへへこぎきたる、  
 いそいそと、すがすがしく。  
 自然のねぼけがほ、  
 まばゆげな秋のまじろき、  
 アウロラは、にこやかに、三味線取つて……  
 これ申初秋様、どうした因果で此の様に、あなたと私は朝と暮、戀するひまも荒浪の  
 寄せては返るうきさだめ、ぬらしともない裾ぬらすとは、なんと悲しうは、ござんせ  
 ぬかいなあ。

### 詩の乙女

ねみだれ姿……  
 白百合の褥をはなれ、

音もなく、青びらうどの、  
 心の夢路をふみありく、  
 詩の乙女……

いつか、また、  
 陽炎のくゆる庵に、  
 戀故か、かりそめの、  
 迷の薙髪、圓顔のわれを、  
 おとなひて、泣きあかす。

なよびては、  
 春の柳は風をはらみ、  
 せかれては、  
 夏の瀧川むせび飛ぶ。



無明の法夜……

こりむすぼれし罌粟の露、  
爪繰る珠数の玉と匂ひ。

理念の闇路……

燃え狂ふ悪の華、

挿しかざす額の烙印。

方丈の……

黄の涙、蠟熔くる、

白銀の火蓋にうつる、

黒の影……

エジプトの古代の文字か、

はた、女人の面。

斯る間を戸外に聲の主ありて、

さ夜格子開けたまへ——

厚衾襪のべたまへ——

七つの鐘の鳴るもなほ、

だきしめ給へわが胸を。

君知るか、

カントは軒端の毒の蜘蛛、

白綾の網巢を織りて、

空蟬の迷ふ赤兒の血をすすする。

カントは亡者の怨霊よ、

道學の朽木の宮に、

青き鬼火の影もゆる、



観念のうつろの鏡立てかけて、  
これ見よがしの仇心。  
血の紋の空鳴りを、  
など獨して悲むか、  
戀の弓君満月にひきしぼり、  
光の征箭を射たまへや。

夢の……

安樂世界は戀の觀世音、

詩は現世、

佛は未來、

哲理は過去の墳穴よ、

銀燭の……

影も燭の燃え殻の、

消えのこる火蓋よ、

其の上にふと開く白百合花の、

色香うする、夢の床、

詩の乙女……

冷えし骸骨をよこたへぬ。

七つの鐘はいま鳴りぬ。

### 露の命

山の上、山の下、

はづゆが月にやどしよと、

きれいな顔をみがきあふ。

みねのおろしが、さつときて、



つゆ、はらはら、木の葉さわさわ、

風のサタンに月の神、  
つゆの命がいとほしや。

### 君は見て

命の打かかげもつ、  
日のうらかげの戀の暗、  
そはくれ匂ふ夢の  
軒端の薬玉よ、  
ゆれて、ゆれて、  
遠きうつりが、  
え消えぬ心のきぬの、  
晝はひとつ、君は見て、

春の柳にわれが眉、  
ながれはぬしが情やと。

### 寄席の看板

黄にぼやけたる寄席の看板  
夜闇の街のほとり雨はしづかに、  
濡れ紙にほのうかぶ呂清の二字に、  
うるほへる夜のやわらかなKiss

そのうちに、  
命の灯、夢の花、  
若い呂清の魂香はゆらく、  
誰がひく絃かしらねども、  
常盤樹の縁にしづむ三味の音よ。



聞く心、かたる心の、  
ああ春もくれはつる。  
美鳥にねぐら教えて春の精、  
いま簾裡へかくれゆく十時半。

### ふられ女

川浪に月のえくぼか、にたにたにた、  
ふられ女、の復讐の顔。  
はやちに木の葉がさらさらさら、  
ふられ女の狂ふ髪の毛。

蛇の眼と、猫の眼と、  
燐光は夜を射る、

蛇にだかれたはだか男の、  
権色にすすけた胸に金の槍。

### 死こそほゝえめ

利鎌もてさと断ちぬ、  
膽吹の山の草の根を、  
其の根をば煎じて呑みぬ、  
けふよりは、君病おもしろ、  
黒がみは枕をだきぬ、  
さればにや、日もかくろひて、  
月もかけぬ、膽吹の草は、  
ふく風にひたなげく……

若草は青のはれぎぬ、



秋あきされば枯かれもせむ、  
 またの春はるをなよびしげらむ、  
 根ねの一つなど惜おしからむ、  
 さるものを、君きみの玉たまの緒な、  
 むすぼるる命いのちの根ねのみ、  
 時とき來きるもなどかは生はえむ。  
 藁わら屋や影かげ浮うき藻もの小こ池いけ、  
 ぬる水みづの心こころをたのむ、  
 鯉こひの尾お緒ひも力ちからなくゆらぎぬ、  
 黄きのにごり——おどみたる塵ちりぞ喘あえぎぬ。

銀杏いんげい塚づか——黄きのちり葉は、  
 茜あかねの墓はか——赤あかき嘆なげきの、秋あきもふけぬ。  
 藥湯やくたうもけふよりは、はたこよひきり、

君きみの瞳ひとみの夢ゆめの池いけ、  
 たゆらに笑えみて、まくらべの、  
 老母らうぼの影かげはうすれたり。

軒のきびさし、露霜つゆしもやどり、  
 遠里とほざとの犬いぬのから吠はえ、  
 灯ともしびの火ひもここえつゝ、  
 眞白ましろなる死しの額ぬかをいぬ。  
 その旦あした、まがきうら、  
 青苔あをこけのふすまをあげて、  
 病やみほうけたるけしの花はな、  
 たゆげに咲さきぬ。……死しこそほゝえぬ。

別れし女



嘆けど、嘆けど、  
心の八重葎、  
蛇の匂ひこみて、  
いつかも出でず。

はて、はて、  
出でんとはする、  
春の日和日、  
たをやめの怨霊の……

消えずに、消えずに、  
陰府の風、  
空よりふいて、  
灰色の天使くるまでは。

み 姿

思は秋風に、  
草の葉の如く、  
珠子玉の如く、  
吹い子の如く、  
おどろき、さわぎ、鳴り響き、  
はては、火をふくよ、青き焔の、  
直中に白衣の君の優姿。

愛の宮に、  
灯なげき、  
花ひらき、  
夜はしづけく、



心の國のいやはての、闇は深くぞ、  
その優姿、鎖ちもえ消さで、  
こよひは昨夜よりほがらかに。

### 園の半日

若きはな、  
赤くしみにらに、  
たゆげに笑ひ、  
あえぎて吐息し、  
ねむりて香ふ。

蝶の夢ふかし、  
日の光青し、  
ベシミストの樂壇、

窓側に置かれて、  
春ぞものうき。

それしやの優姿、  
(性の暗示)  
影はほのかに、  
浮くとも見しが、  
花はうつむく。

獨ほほえむ、  
柔絹の肌身、  
ふるる淋しさ、  
くゆる椿の、  
葉もこそゆらげ。



園の極秘は、  
噴上の水に、  
天使の幻、  
翼ぞふるく、  
眺め入る時。

楚音にきゆる、  
柔土の糸遊に、  
忘却の紋章を、  
読みつつ歩む、  
人ののどけさ。

黒い蝶

利根川の朝靄に、  
鳥の影が浮いた時、  
若い女が身をなげた。

夢につかれた枕下、  
黒い蝶々がばたばたと、  
私の鼻を掠めとぶ。

どこの庭から来たのやら、  
花の香がするだろと、  
片手でおさえて嗅いでみた。

髪の毛がふんとする。  
あれよ思はず放したら、



利根川さして飛び去つた。

### 五月の戀

まどろめる、  
月の春の夢、  
さみしき光は、  
回想を照らす。

眠る葉の、  
暖な吐息、  
夜は若く、  
精は赤し。

物實は物の殻、

生は死の紀念、  
闇をゆく袖に、  
五月はにほふ。  
闇を行く袖の、  
五月のにはひ、  
戀はなまぬるき、  
霧のころぞ。

### 三日月

太陽はとぐろまく、  
金の蛇よ。

光は老母の銀の、



髪かみの毛けよ。

世界せかいはあくびして、  
雲くもこそなげけ。

吾わが世よの末すえは、今いま暮くれて、  
ヴエーヌス死しにぬ。

かたみなる櫛くしの三日かづき月つき。  
人ひと仰あはぎ見る。

### 夕暮と雨との詩

夏なつも來きた夕ゆふ榮はえの涙なみだがほろりと落おちたのか庭にはくま草こしげみの小こ茂げみの紅ルビ寶石ビーのやうな花はな一りん輪りん、あの西にしの彗ひこほし星しほしの光ひかりに染そまつたのか涼すずかぜ風かぜに翻ひらへる青あを葉は綠どり葉は。自然しぜんは大おほきな音おん樂がくです。夕ゆふ闇やみの底そこ

の田た蛙かはず。小こ松まつが峯みねの嵐あらし雨あめのしづく、天てんは限かぎなき祝しゆく福ふくのオオルケケスストラです。希ぎり臘しやの古こ代だ人は星ほしの光ひかりの神かみの歌うたを聞きき、月つきの影かげにひそやかな調しらべを感かんじた。あの若わかかつた希ぎり臘しや人の魂たましひは、アポローのお宮みやの橄欖かんらんの梢こずえにはづかにぞ響ひびく妙たへなる風かぜの心こころを假かりて象かたど取るリウラでありました。私わたくし、ひと頃ころを詩しの世よの中なかに浮うかれ住すみ、うらぶれ暮くして、いつしかも復また四は番ばん町ちやうの軒つき端はかたむく破やれ家やの二にかい階かい、月つきを對あ手ての獨ひとり住ま居ま、寢ね遠とほにひゞく市いちが谷や八はち幡まんの四よつ時ときの鐘かねにしづ心こころなく、無む絃げんの琴ことは共とも鳴なりあはれに、

### 寂滅と紫の夜つ鐘の音

ひよんな俳句はいくのもづり様やう、情つぐ々と詩しはどんなものを指さして云いふのか、彼かれ此こと思おもひ煩わづらひ、東とう洋やうの詩人しじんのふるい言いひ傳つたへに、理り窟くつなしに詠よめとは、多た分ぶん感かん情じやうの裏うらをかいた教おしへ草くさ、さりとして、同おなじ流ながれも鄙ひなと都みやこと趣おもむきは違ちがひ、山やまより湧わくと海うみへ注そぐと、西にし東ひがし、朝あさな夕ゆふなに音おとも色いろも光ひかりも深ふかみも異ことなるからは、只ただ、ぼつねんと感かん情じやうでは分わかりかねます。されば水みづの如ごとく流ながれ水みづのごとく逝しくとやらゲイテも謠うたひ、水みづなる哉かな水みづと孔子こうしも教おしへ。水みづは自然しぜんの粹すい、赤あか兒こは人ひとの精せい、われら赤あか兒このごとく泣なき、赤あか兒このごとく笑わらひ、よろづ赤あか兒こを手て本ほんとしたらば、真しんの詩しは出で來きさうなものとふと思おもひつき、われら大おほきな



赤兒となりすまして、三界を泣いてくらしめて笑つて過したしと感じました。大哲へー  
ゲルがヴェルデン即ち物みなは唯轉じ逝くと云つたのは、赤兒の聲がヴェルデンして  
詩の韻律となる根本の大則かと感ぜられます。

スピノザも人の言は神の命する所、神は全體で人は破片だと云ひました。ゲイテの  
詩的スピノザニズムスは自然と靈魂の合奏つまり、わが魂の聲は自ら神のみ言葉  
にして即ち詩であると云ふ美しき主張かと存じます。私さらにこの眞理を慥めん爲め  
に、レオナルド・ダ・ウキンチの宣告をお目に掛けましょう。

あはれ、藝人よ、君の變幻終りなきは、自然の現れとすべて同じく。されば、御神  
の始め給ひしこと共を、君また爲し給へ。人手にかゝりし、著作の跡追ひて徒らに塵  
を積み給ふな。たゞみ神が悠久の始をまね給へ。誰にもまね給ふな。さらば君の著作  
は何れも新しき自然の現れとならむ。

さて、この眞理は如何にして體得するを得るか、私はユンガ・ゲエテの戀の跡を弔ひ、  
わがホウマンシユタアルの詩の片破を味はふ毎に、  
ベリウルクとエムピンドンクとの外には無いと存じます。始は相感終は官能と

譯して置きます、自ら動ずして神に由つて感じ、理念を経て情を驅らず、自然にふれ  
て魂を飛ばすのが肝要でしょう。斯う云ふ境域に住んで斯う云ふ経験を重ねますに  
は、戀を離れてはなりません。戀は最も純粹なジンリヒカイトですから。ジンリヒカ  
イトを私は神經的自然と譯して見たいと思ひます。ヴェーゼンに對しては。スピ  
ノザが戀は機感的快樂だと申して居りますが私は單に自然的機感即ち Natürliche Erre  
gung der Sinnlichkeit と云ひたいのです。斯う云ふ大きな概念を與へますと、戀は神  
に映りたる人の影です、私共は女に與へることく、萬有にこの戀をさへげたいのです。  
此が即ちベリウルクでゲーテ詩が所謂詩的スピノザニズムスの化の皮です。

つまり、吾々が風のどよめき草葉のすゝり泣き、星屑の匂、花の香、夢、なににて  
もあれ、神秘的な深い、はあつと感に堪えない境域に出逢ふ場合があります。これが即  
ち詩素 (Innerliches Element der Poesie) であります。

詩私以上で、雑と詩を味はふ要意をお話しましたが、次にフランスのロマンチック  
の詩人が、迷ひ荒んだ受身の詩は信仰と期望の詩と相闘ふと云つてますが、これは、  
エドアル・ツルケットの言で詩味を言ひ當てた者と存じます。こゝ迄來ると玩は宗教では







肌つめたさにわれを酔ふ、  
 このうるはしき夏の夜の、  
 げに、静なるけはいよな、  
 こゝ、魂の幸をおぼえて、  
 夢めと和みてとろけぬれ。  
 ても、あはれ、み空よ、君にかゝる夜を、  
 千度もわれはかきましものを、  
 わが乙女、一夜をわれにかすや、否。

### 夕暮の音

モルゲンシユテルン

夕暮や、ぬしが長い浪のそこ。とつぶり沈む鐘の音。わしがつらい情のひくいねも、  
 ぬしがゆらげばやんわり溶けて、生の鐘の音、運命の鐘の音の、永遠なああの歌に今も  
 つれ合。わしが頭のどんぞこ迄も、鳴るわい。鳴るわい。鳴るわいなあ。

### 途上の微雨

ヴェルレーヌ

心、など泣くかなれのみ、わが心よ。  
 ふる雨、ふるそぼそぼ……と。  
 あな、あこがれよ、復とはわれを、  
 雨はふる、しとしと……と。

とことわに響ぞひとつ！  
 かなし！あこがれの翼はゆらぐ。  
 窓のガラスにひたひた……と、  
 やさしき、やさしきメロダイ。  
 底井知られず、わが心の傷よ、



涙ぞふるかとなみだぞ。  
聞き分もなきあこがれは、  
底井知られず、われを悲め。

お、あの悪き怨みよ、あの、  
底井も知れずに、  
泣け、かなしく、泣けとか、  
こひもなく、憎もなしに。

雨

ヴェルハアレン

雨の線り糸かぎりなく、  
灰白みゆく日もすがら綾織り返す。  
緑の垣の隅々の網のからくり、

あの灰色の糸かけてかぎりなく、  
雨ふる、ふるかぎりなく、

雨。

昨日より斯くも無限にふりつのも、  
雲のつゞれが空の四つ壁とりまいて、  
ぬれて、色香もすつかりきゆる。  
昨日より雨が氣儘に勝手にどつさり降つて、  
うす暗がりをも、ひそめき喘ぐ瀧川が、  
家根から、路から、かぎりなく。

荒地をよぎり、はるかに遠く、  
閃めきながら切つ立てる道の上、



はてもなく遠地に曲りかよへる小路の上、  
車輪がきしる。

雨の糸の綾おるなかを喘ぎてひかれ、

びしやびしやと雨はね返す葢ひははがれ、

滞ほりがちのその姿

葬式の行列かとはばかり、

さらめく軌道は遠く天に入り、

人こそ聞かめ、その音は時の路にやあらならん、

と、轟々と潮の水はひた流る。

木立、軒並、聲を呑みて哭き、

雨の鞭、雨のしもの、

いつはつべしと思はれず。

瀧つ瀬は闇をさきやぶりてぞどろと落ち、

ひたひたと牧野の刈草ながす。

風は荒れ野に、簾に、木にむちうつて、

たゞ、浪の白泡。

金牛星座はうかみ出でた星の色、空にぞもゆる。

糸のごとみだれたる。

夕暮はぬれて、蔭影とともにきて、

野と草むらをうちけぶらせて隠すかな。

しきりなく、なほも雨ふる。流れ、流る。

これ、うつすりとあれければと、絹にも似たれ。

雨ふる。雨はひとつ色の糸をぞくる。

灰色の織物を、ひと針ごとに、一尺ごとに、縫うてゆく。

あつきヴェールは村をとりまき、その村やくすぼけて、うちけむるらし。

さきつごろ網にかゝつて無茶苦茶になつてしまつた洗濯物が、

長き木の枝に、人のかけたるそのまゝに、



山のはに鳩の小屋、伏せ屋、ぱつと輝やくあかり窓、  
 たゞ、青の、べ紙おしひろげ、  
 家々の軒端にポトリポトリと雨だれが、  
 十字架が石の屋翼をとりまけるごとく、  
 つかれはて、あの岡の上につどひたる、羽ばたきもせぬ鳥の數。寺の塔、はるかを眺  
 め、雨がふる。長雨が、糸とみだれて、  
 その浪をもて、漂ゆふ髪の毛をもて、  
 所々のまらうど、灰色に老いぬる雨よ。  
 永遠のこりてむすばる力もて。

### 萬有と私

鬨の聲が聞える。萬有が私に突貫する。笑へ、笑へ、白い笑の渦がぐるぐるつと萬  
 有を夢の海底に捲き込む萬有の死と私の勝利。人は奮闘のシムボルで、勝利は刹那  
 の繼續である。萬有は悠久の敵、私？ 私は何か知らむ。

### 金の十字架

銀の十字は不品行な女が胸にさげる紋章と思つたら、いつしか金の十字が世界の帝王  
 の冠に着けられた。そして女の胸に眞紅の十字がかざられた。若い暖い時代が来て、  
 帝王と私が手を握つて、默契の饒舌に酔ふた。平和は更に深い平和を生む。金の十字  
 は帝王が支配し、赤の十字は私が支配すると云ふ證文の交換の時、私の署名の下に捺印  
 が無かつた。判を探したら小指の頭が青山の二字を刻り出した。處で印肉が無い。帝王  
 は私の胸を指しながら、其處にあるぢやないかと笑つた。私の小指が心臓にふれた時、  
 血がたらたらと滴つた帝王がふつと掻き消えて、死の闇に罌粟が一輪バツと開いた。

### 青山の遊び

酒に酔ひしれた晩、秋の月が青白い薄靄のやうな光で、青山の原を包む。私は土浦土  
 産の黒燧の正宗を二本兩手に携へて、小口からゴボゴボと飲んで、獨り面白可笑く  
 駈け廻る。心が原か、原が心か、ゆで章魚みたいな色澤で、金の髪が禿げた頭の兩側



から垂れてる、お爺さんが、灰色の着物を着けて佇すむ。おれは老悪魔だと叫く。嫌だと袖を振つて、遁げ出すと、眞黒な大入道が七八つの子供みたいな可愛い口元をして、面白さうに笑つてる。

屹度悪魔の子だらうと、思つて、追つかけると、煙の裾を揺りながらにげちまつた。私は疲れて草の褥にぶつたをれた。草葉の蔭で、柔土の黄ろい奥から、ヴェーヌスがしきりと淨瑠璃を語つてる。聞き惚れて、うつとり眠りかけると、象牙の白い撥が私の頬つ邊を突つく。ヴェーヌスが小頸をかしげて、鬢を泛べて、とろりとした眼で私を睨む。はつと思つて起き上ると、夜露が頬を流れて、唇にうつる。甘い神秘な香がした正宗をゴボゴボ云はして呑むでしまつた。急にあの女の事を思ひ出した。そら恐ろしくてたまらないから、駆けながら、電車道へ出た。最終電車が一つ目小僧みたいな充血した眼をむき出しながらやつて来た。お恐ろしいと女の聲がする。振り向くとあの女が肩をすぼめて、闇を向いた。私は電車に飛び乗つた。

### 悪い女

大きな古いこやす貝の殻には、時代の土が苔が、限りなき悲哀が――そしてその精なる一輪の赤い花が、青い莖の末に開いて居る。けふ悪の前兆、きのふ安産の謎、そして女のお守で、百年前には薄紙で包まれて、簞笥の控き出の中に、百年後は墓場の重い石の下に、

この頃は春である。虞美人草は若い秘密を守つて裏庭に懶げに咲いて居る。土も苔も、ない美しいこやす貝はのどかな快樂の光を反射して子供のドルバコとなつてる。

### 好きな

あさばらけ、怒の潮は天の涯を洗つて、神秘の岩の沈黙を罵る。どこまでも、どこまでも、限りなき夢の甘い海、然し苦鹹は流れる。満十の時の、否、月影の幻調の高低につれて、狂へる浪は笑つて岸に、打ちよせ、泣いて沖へ歸る。苦鹽、その苦鹽は金色の浪の、凡ての秘密を説明する。神の妙薬、不老不死のサムボル、それ故人は之を喜ぶ苦鹽をなめる。ああ、彼の女は私の苦鹽である。甘い碧の心の海をながれてる。



### 自由は死んで居る

空氣は毒蛇の息だ。自然は惡魔の幻だ。  
 貴様は何故生れたのか、存在は水の上の舟、  
 意志は乗る人のさす棹だ。  
 自由はとうに死んで居る。

### 吾に酔へる藝術

創作とは個性の眞面目なる體現である。其故、廣い意味に於ける自然に現はれたる我であるとも言へる。即ち、藝術家の努力は主觀の胎内にある存在を意味ある者として容觀の世界に産み出さうとする處にある。夢を現に、現を夢に、吾を自然に、自然を吾に結び着け照し合せて、見えぬ物が鏡に映り、擲めぬ像が吾に宿り、藝術品は出來あがる。であるから、オリヂナリテイの供なはぬ藝術は主觀の具はらぬ藝術で、存在の無い事となる。

十人の旅客が海を隔て、遠山を眺めるに、一人は五十里、一人は百里、十人十色、各自ばらばらな距離を主張する、いくら平面描寫を力説し、客觀主義を標榜しても、到底、現實の眞を求める事は出來ぬ。皆、てんでんばらばらな假の眞を信じて居るだけである。假の眞、これ人生の豫期、藝術の主眼ではあるまいか、搖籃と墓場とが吾が世のシムボルならば、吾等は時と空間とを愛する天地の遊子であらう。遊子は越し方の里程を數へて、前途の幾何里程を憂慮する、越し方も行く末も漂よう雲の夢なれば回想も豫想も胸にゆらぐ生死の浪ではないか、感覺を信するなら存在を信じて善い筈だ、路傍の里標を指すならば遊子の旅情を察するが好い。文學の科學的態度、形式的の眞、凡ては路傍の標を問ふものである。自然主義は要するに過去が置き捨てにした、動かぬ換りには死んで居る存在を計算して行かうとするのだ、吾等アトラスはローマスの世界を脊負て何の爲に駆けめぐるのか使命と運數即ち、生と死とを感じるからではないか、肩なる小宇宙はアトラスの命の球である、此が爲にアトラスは走る、里標を數へん爲めでない。又吾等は經驗の土の上に、色色な觀念の建築物を立てたり壊したりして居る灰色な動物である。經驗の土に執着するのは、イデーの建物の爲で



ある。蒲團の香を嗅ぎ惑ふのは、その上に据えられたる戀の建物が慕はしいからである。凡て吾等が經驗の土の上に建てたる觀念の建物は時世の間、朽ち果つるとも消え失する物ではない。藝は眞面目、浮世は樂しと叫ぶ近代獨逸人の建てたる住み家の傍らには、藝は遊び、世は眞面目と唱へたる觀念の建物が古めかしくも奥床しく、マホメダンのカペラにも似て、ワイマール王城の片隅シルレル銅像と共に屹立して居るではないか、斯く感じ來れば、フランスの前類唐派ボードレルの散文詩「何れか眞」を思ひ起さずに居られない。

偉大なるジニアスが建立したるイデーの建物は、その時代人士の生活には最も適當せる住みかである。けれども、自分自分が建立したイデーの住みかは、ちつとやそつと、窮意でも不自由でも住み心の格別好い物に相違ない。それすら出來ないものは藝術家たるには及ばぬ理だ、それから、自分でエツチラ、オツチラ創作した代物が生憎二三十年前の偉ひ人の遺書中にあつたなど云ふハンマ骨折も、決して疲勞儲にはならぬ。何者、既成の作品や思想を讀聞したのと、自ら發見したのとは心理上の過程が違ふ。第一自分が生み出したのと人のを唱つたのとは味が圓で違ふ。即ちオリヂナ

リテイは自己の憧憬を期待する。ネオロマンチックの本領は此處である。生きんとする努力は吾に酔はんとする祝福を控えて居るからだ、醒めれば空虚の悲哀があり、酔へば本能の充足がある。現在の眞、主觀の吾、何れが幻影か、現實に醒めよとは又新たなる杯を取らむが爲である。酒に酔ひ給へ、女に酔ひ給へ、道徳に酔ひ給へ、何んでも善いから酔ひ給へと叫んだ自然主義の詩人は吾に醉へることを忘れたのか、それとも、自から知らなかつたのか、私は罪惡にさめ給へ、道徳にさめ給へ、男にさめ給へ、女にさめ給へ、そして、吾にのみ酔ひ給へと云ふ、吾等青年は自ら醉へる藝術が作つて見たいものだ。

私

私、即ち第二の自然、兎も角光ある存在の假象として、今日迄自分を疑はずに、又疑ひ切れずに存續して來た生活の全部は、詐偽か眞面目か、世間と云ふ他の實在を認承するが故に自己を苛むものあるならば、いざ知らず、「私」あるが故に「私」を苛むものあれば、それは私の友人で先生である。



實在か假象か、私の哲學は客觀的に私を觀察する必要を認めぬ。只意志及表象としての世界に、理情合體の小宇宙が如何なる程度迄存在の價値を有し、且つ認識せられ得べきか、私が哲學を發表する任務はここである。

世界は譬旨的意力の發展であると云ふシヨペンハウエルニズムスは私も同感である然し、譬旨的と云ふ形容詞は個人の見たる世界即ち假現と實在との關係を説明したもので、併せて厭世哲學のオリギナルではないか。私は、實在の必然性と假現の本性性を認めて、厭世哲學の搖籃を去らうと決慮した。即ち、世界は本能としての意力發展である。そして斯る發展は常に必然的である。必然的本能的表象としての世界は私の所有であり、小哲學の價値である。再び

世界を本能としての意力發展と名付けたのは、フリードリッヒ・ニーチエの思想體得であるかも知れないが、ニーチエは意力發展の必然性を力説しないで、意力發展を詩化し、觀念化し、謳歌したる新時代の讚美歌作者ではなかつたか、彼の思想が危険であり、誇大である理由は、神の攝理即ち自我の必然性を考へ及ばなかつたからでしやう。

私は哲學が時代の產物で、抽象的の藝術であると云ふ私一家の信仰を持ちまして、近代人の二重人格を最早疑へない眞理と存じまして、その二重人格の起源はエゴイズムと自我主義の衝突例へば男女の戀であります。世間的に何ふしても成立たぬ。けれども、個人的には苦もなく成立つと云ふ場合、その取捨に迷ふことは有勝な事實である。斯く生死の間に挿まつて身の去就に懊む結果は、意志を失ふ次第である。つまり利益生活と本能生活とのクロス・デイヴィジョンは一つ體に理知的性格と情意性格との二方面を開拓して立派な二重人格を産出致します。更に斯る人格の人はベスマスチツシユなナイーブなネルボジテイトな傾向を帯びて、その性格の輕重偏跛に由つて、男性的デカダンツとなり、女性的孤獨主義となつてくる。そして彼等ナツールのオルガニジイルンクに従つて支配せられる。つまり、ヴェルデン、決して敢爲することとは出来ませぬ。私は之を世界の必然性と稱するのです。私は「私の」爲めに世界を作らうとする人物で、世界を必然性とするのも、私の安住と内的要求に過ぎぬ。蝸牛虫と蟻虫とは私の友人である。彼等は自分自分に都合の好い、すみかを具へて居るから、斯る孤獨な猥癡な私にも、文藝あり、哲學あり、宗教あり、自然あることを



首張したのが、この一巻であります。

## 他人

私には他人と云ふものを認識する能力がありません。従つて世間が分りませぬ。恐らく一生分らないと存じます。

私の肉體と他人とは引き離すことが出来ない關係であると存じます。それ故私には他人に要求もする。世話もたのむ。いつも同等のレベルにあるものと考へる。けども情慾及理智の生活に於ては、他人は私の從屬か、門人かそれとも不幸なる敵か、どのみち大した値段を拂つて、私と同等のレベルに置くことを許しませぬ。それ故肉體と靈とが了解されぬからは、私には他人を認識する義務も能力も要らない筈です。今一つ私に官能生活が出来て、理情生活と鼎立し得ることく、三重人格の人となり得たらば、私はどんなに幸福でしやう。私の哲學と盲目とが一變して、眞人間の生涯を送ることが出来るからです。

それまで、即ち、一生私は何んな態度と心持で他人に接觸するか、女には戀と偽

りとを捧げましょう。男には愛と憎みとを捧げましょう。

私は世間に向つて嫉妬と厭忌と詐僞と戀慾とを捧げ、その報酬としては、金と女と酒と孤獨とを要求致します。死んでからは虚名を要求致します。私の生活及事業は生存中の金と死後の名と、この二つの爲めです、これが爲めには、あらゆる罪惡も道徳もやつて見るメンタルポジビリティを有つて居ります。

## 幻の短銃

廻廊の赤錆色に煤けたる扉に猫の目の如く青光る血痕の香を嗅ぎながらひそひそとすゝり泣く白衣の若い女、

榛の樹の葉末を冴え渡る月光に思ひ出の幻を追ひつめて在りし日の怨言を繰り返す。

貴君え、聴きませ、在りし日の事を……

此の長廊に燭を乗る若き二人の戀さゝめきの波の輪がうすら紅く體えばんだ夜の空



氣に揺れながら私の心を取りめぐり柔かく碎けゆく時……  
なほ物足らぬ感觸に胸の血は渦巻いて凶亂の世界を描く……虹の輪の赤い靄にふと  
浮ぶ仇し女、

嫉妬の怨嗟の燃える情念にふりそぐ赤い涙吾を忘れて閃かす洋銀の短銃、稻妻の  
寒い光が右の手の裏より走る……

幻の君が優顔に凍える青い血の滴り胸の火を掻き消して仄白む月の光をゆさぶりて  
潤へる夜風が吾が幻の小さな世界を運び去る。

戀の赤葡萄酒を湛えたる心の酒甕——若い男の心臓を破りでる血の青い痕、雨が降  
り嵐が吹き夜が泣く幾年の後若い白衣の女暗い囚人の部室を立ち出でて——縲紲の解  
かれたる今夜長い廻廊の隅に佇む……血痕は月に青光る。なべて此れ月の夜を及に血  
塗るクピトーの悪戯よ。

### 火の釘

悪魔よ、

吾が胸のひた中に打ち込む汝が火の釘、聞け汝が打ち卸す金槌の音の鋭さ。斯くて

天國の夢は破れ、死の音楽のメロヂイぞ聞ゆ。

吾が肋骨の燃ゆる苦惱よ、黄蠟の花くだけ散り、罌粟の露心臓を流れ落つ。されど

も幻影は朗かなり。幻影は朗かなり。

悪魔よ、見よ、

縲影の巢を匂ひ出て、火の釘に繞る心靈の蛇を、裂けたる黒き舌は汝の兩眼を刺

さんとす。

悪魔よ、汝無邪氣なる天國の奴隸よ、

吾が肉を焼き、肋骨を破りて、幻影を奪はんとす去れども火の釘を滴る蠟の光に

幻影は朗かなり、幻影は朗かなり。今はた汝は幻影の奴隸なり。自我の奴隸なり。



### 矛盾觀

詩は藝術の弱點だ。詩人は浮世の尤も伶俐な諷刺家だ。世界は天と地と云ふ大きな矛盾の間にぶらさがつてゐる癡癡病院だ。ある宗教家が書いたあの立派な立志傳の第一頁には、屹度梅毒搔の文豪が出て居るに違ない。ある矛盾狂の詩人が書いた評論の第一節には、屹度キリストは悪魔の子なりとあるに相違ない。

然うだ、矛盾は滑稽と悲哀とが一晩こつそりと姦通して出來した私生兒だもの、一體世に私生兒程有難く尊いものは無い。純潔な愛と血と苦みと悶えと葛闘とが、御前の胸の奥所で愉快なフージルと魅力ある水とを拵へてゐるのだ。法律が定めて法律が生むだ無形の私生兒よりか、男が惚れて女が生むだ眞實眞の私生兒はどの位有難いか知れない。今の日本は否世界は私生兒を生まなくては到底眞の人生には入る事は出來ない。法律の子が阿呆陀羅經を唸るから、つまり博士が新體詩を作るのだ。

### 女義太夫

拭き上げた夕の椽を涼風の戸惑ふ寄席の片隅に、團扇も要らぬ夜と湯上りの薄物軽く、しどけなく巻帯引き廻し、若楓ことしは初紅葉のうれしさも嘸と聞きなれた壺坂の靈驗記數寄が手傳ふ寄席通ひ、椽の柱に身を凭せて、二洲亭が初看板、若眞打の盤見たしと宵の口はうつらうつらと聞きながし、中入に澁茶を啜り無益ながら吾が喉を潤し、先づは玉の御聲を待つ。簾裡より柝木の聲、徳川の夢の名残りも夜はふけて、高座に塵の影もなく、捲くし上げ香爐の雪も色が黒いなど、思なし太夫の富士額、見臺は黒漆光澤も濃く、絹房は白糸にべにの撚糸をまじへ、金の浮き繪は日の丸に鶴一羽、下には夫婦龜萬歳川の流れも深い世話物に名取の眞打、其の名は云ふに増る、姓は竹本とのみ記し給へ。三味線は竹本のなにがし瓢が一の弟子、いつか師を離れ島、ひとり身を倭寛程はうらまぬとか、適は今の人、黄の三筋、撥當に虫の音ほども怨言は云はせず、柔かに根緊は確なもの、沈黙は續く。百五十人耳は三百、胸の連山火吹嶽、餘所目には見えぬが煙草の煙のみ立つ。

聲句ひ調なだらかに太夫はことし二十一、語り口澁からぬは太夫の心意氣と口善惡無い京童、師の面影、きのふ至盛の夢の跡もさすが入念の女弟子残るがなつかし



い。瓢箪の酒今の人は味知らぬかと時をうらむ物知りも有つた。壺坂のかたほとりほつと熱い息、聴き耳を立てれば、撥音はあはれに遠い。ふとお里の心が見えませぬわれも男の其の邊りは盲目も同じ、作者は千賀女、太夫も女、語りに卒はあるまいが、われと吹く煙草の煙たさ。

惜しい處を讀み終へて、座頭が三味の音も、お里の呼び聲も、此の世の糸車もつれる糸の手違ひより、くらがり峠世すがは無言の杖一本なくしては踐みはずす崖千丈、死ぬが増とは嫉妬にはなく、物知り顔の戀の意地、めくらの情、おさとは弱い女氣か、觀音の慈悲も嘘の皮一枚剥げば此の世は地獄谷、語り口、節附、物腰、處作振、うれしき者は太夫ばかり、其の返るさ三つ子を脊負ふ丸鬚は鬚のそげた年増のやつれ女と二人並んで、お錢があれば毎晩ねえと、贅澤は云はぬこと、此の一夜が戀の安樂世界、四つに折つた枕紙、情は其の裡にと、亭主もわれと佛顔、十五錢の鼻藥、それにてぐつと胸のすく理。

戀瀬川は橋の無くともと、獨身は氣樂な者、あくる夜も又の夜も、雨夜は情深しとそよ風の饒舌、袖にふれる太夫の幻ふつと掻き消えて、眞顔となつて見たしと、席亭は宿の近くだが、下駄の齒はいくらか減つたやう、太十、御所櫻、鰻谷は心とがめて行きづらく、酒屋、質店、阿波鳴門、野崎村、梅忠、宿屋と數を踏むで、堀川は心から、太夫の得意がわれの好く語り物、とかくは氣暗みおもはゆい異性の音樂の、耳よりは胸にこたへて、關心には節も喉も分らなく、此の頃は聞かなくなつた。

二つの角

君、女は二つの角を有つてる。君のラバアの角は大きいか、小さいか、柔かいか、堅いか、なに其んな者があつてたまる者かと。馬鹿、見えないか、直に行つて、ラバアの襟を開いて見ろ。赤い刺をもつた二つの角がある。さ、その角だ。堅いか、柔いか、赤か紫か、まつすぐか、垂れてるか、二つの返事が聞きたい。私に了簡があるから……

友の形がふつと消えて、坊主頭に眞つ黒な顔、金色の眼でニコニコと笑つた。惡魔か釋迦か其の幻は未だ別らぬ。



厩犬

青天鷲の土を踏む幻の女の白い細脛に絡みつく糸遊の夢の如く消えて行く戀の名  
残りの薄れゆく移り香を、嗅ぎ廻る厩犬よ。其の醜惡な毛深い鈍なむさ苦しい姿を、  
早く地獄の火の井戸の中へ、投げ込むでしまへ。  
僕の一生が時代の影を、後に前に右に左に、引きづりながら、兎ても醒め止まぬ心  
熱の黄ろい煙にむせび、惡魔の古重を——心の牢獄を遁げも得やらす悶え死なふとす  
る矢先に、半人半獸の妖怪の牙の如き運命の白刃が、僕の血肉の一片づつを、切りさ  
いなんて彼の厩犬の鼻先に投げてくれる忌忌しさ。其の度に、厩犬は尾を掉つて凹  
んだ眼に淫蕩な光を湛えて僕を嘲笑ふ。そして、宗教は無い、宗教は無いと吠え猛け  
る。

戀女房の化の皮

二十四の春も盡きる頃、結婚問題が持ち上り、と云へば世間有體の事ながら、實は

身から出た鏽びの、地金もとんと腐る程に、内所は刀篋筒、鑑定する人も段々と減る  
けふ日は、鮫銷に金びか物など誰々の銘と云はない裡に買ふ方もなきにしもあらず。  
商買は遺線が大切と流石に後家が固めた財産、なけなしの醜男よりは當世面、コスメ  
チックと髪分け方が大切、ぶんとひよんな香に御酒の味も上戸下戸、臺の物の附け  
鹽梅が好いの悪いのと、若旦那利口な處で御分別、惚れられた、惚れられたが馬鹿囃  
に酒も一合呑んだが二合呑んだか甘い合點で、ちやんと財布がすつかからかん。けふは  
お座なりの藝當、あいあい、お引けの時の一拍子、呂の字附が一番お芽出度。  
いろは歌は戀の始まり。路次内のお家は隱妻、野呂間は旦那の當り。男の惚けと  
女の咀ひ、のろのろと二人寝た晩が戀の初夢とかで、間もなく若旦那女房を持ちなさ  
つた。なんでも横町の、ほれあの、軒燈に墨黒黒と豊竹〇〇、やつぱり呂の字付の義  
太夫語、年の頃が二十三で、紅白粉塗らぬ處が、素顔の上手、下手とも聞かない前に  
若旦那氣に入つたとやら、いけ好かないご吹聴。澁皮が向けたとやらも甘いご詮議、  
眼のくり玉が千人に一人も見ない猿芝居の中幕に出てくる猫又そつくり、それでもお  
氣に召した物なら蔭口も女の常と噂はバツと廣がつた頃。久方振の待合通ひ、ちやほ



や饗す蔭日向。明すざりると、電燈をバツと消して、寢た晩の事、恐かつたよ、まあ、聞いておくれつてば姉さん。

若旦那が、床間の瓢箪取つて、ポコンポコン私のお腹を打つんだよう。お前なあ夫婦の約束もしねえし、夢の櫻木しつぽりと、えつてばおい村雨、ふん、此方はその目算で居たあ、其れでなくつちあ誰が惚れるもんかと、何つ切り殺すぞ、う切れ切れねえや。痛い様つてば若旦那、う何が痛い。つて私の枕をおつ取つて鼻つ先へ押し付けてね、うん一治の匂ひがすらあ、手前なあ夫婦の約束だけやあ爲ねえつて云つたぢやねえか、う何泣いて居やがるんてい。何おれが許かしたつて、馬鹿つ、手前が勝手に惚れたのよう。何つ、廓物が惚れるにやあ詮議がいらあだ、さあお錢おくれ、夫婦にやあならなくつても善いから、あたいが困つた時やあ佐けるつて云つたろ。さあ佐けておくれ若旦那に用があるんだから、あ、あつ、村雨手前まだ其許に居るのか、お前にやあ、あの時だつて惚れて居なかつたんてい。云、あたいは鶴羽だよ百二十圓おくれつてば、くれると云ふものはよすが男だらう。一治はあたいが世話したんだからね、惚れたからにやあ女房にしておやり、硝子玉に火が映つたやうな眼、

芋虫の汁を塗つたやうな顔だ。うん、どうせ、あなたの女房ぢやないからね、金よこさんと殺すよと出刃庖丁をふり翳す、あ、あ、待ておい鶴羽、云許せつてば許すよ、だが、あなたの女房の名前をお言ひ。おれの女房だ、ふん義太夫語だ。いと義太夫語、それぢややつぱり黒人だね。善いから名前お聴かせ、善いから、豊竹〇〇だ。あ、あつ村雨、何を追つかけるんだい、何を。そりや乃公の女房だよ、おい、あ違ふ違ふ、おい乃公の女房は名が違ふ。あれぢやあ無いつてば、あ、まだ追つ駈けやがる。ぢや何と云ふんだね、あなた、おのれか、おれの女房は伊藤およしつていふ奴、えあの女かい。

あッははは、あッははは、彼なら許してやらあ、眞人間ぢや無いんだから、七人八人立ち變り入れ換る昔の袖分、残る一人が熟み饅えばんだ無花果色の顔、眼からは血の涙、眉毛に芋虫そつくりの嵩蓋がむつくり、唇がもげて齒ぐきがぶらぶらぶら、他は二十四人の昔の馴染、おほ、おほ、おほ、あれがあなたの戀女房、今は成る程の別嬪さんだが、しまいにや、ああ成る様に待つてるよ。ふつつと醒めたその晩が、女房興入のあつた晩、瓢箪で叩かれた女房の腹がふくれて茶壺をだいた頃、噂を



待ち合の壁一重、若旦那も氣が違う筈。兎角云はれても戀知る人は仕合なり。

(附録) 三保の浦島噂の千鳥

三保の浦、瑠璃の飛玉に白浪の翼ひるがへす水の精、あちやこち、岸の眞砂や岩が根に、久遠の歌を、満干の曲おもしろく、天の樂器に調べつつ、ドドド——ザザブン!

朝ぼらけ、有明の月の影もれて、うす紫の春の雲、魚鱗のごとく棚引いて、行く末は夢の占形、天女らが明けて化粧の鏡臺、櫛笄の飾とも、星に眞珠の光澤うせて、松原遠く、ほのぼのと飛ぶや白鳥、沖つ鷗の白い羽、白い、白い、眞白な、それ奈落の帆掛船、よい、よい、よいとなあ! 漕がれくる悪魔龜夫が玉の棹、萬歳かわらぬ濃緑の竹に雀も海に入つては蛤の貝の情や玉串、蓋さ



へ取れば煙の中に、龍宮城、嬉しやと思ふ隙さへ浪路を鎖す薄霧  
の風にふつつり拂はれて、あとかたも無き三保の浦、朝な夕なの  
釣り船や、松原五町里三里、離れ住まるに世を忍ぶ假の宿とは心  
なき浦島親子、時雨に欲しき笠や蓑、ええしよんがいな、年の若  
いが身に崇る。さりとは、さりとは父子七世が漁り火に夜釣の殺  
生、天道様に背いたが因業な。十八年のその昔、この浦島が母御  
の腹に居つた頃、父上が盲目の龜を釣つたとやら、乙姫様のみ使  
の、まして、盲目と知るからは、腹の子の首尾もあれ、釣竿焼  
いて船賣つて、この龜殿へは酒澤山振る舞うて、殺生は六代限り、  
生れ子が女なら遠い遠い大和の國は海しらぬ村へ里子に、あいや  
この間、夢の夜伽か、夜伽の夢に、母様が見たとやら聞いたとや

ら、その生れ子は男にて、玉の體や花の顔、そも亦因果、乙姫が  
殺生の崇の末の執念とて、彌生の半、軒もる月に春柳の朧の情知  
らぬ間に、世を龍宮に逃れ來て、この乙姫が閨の塵掃くが定ぞや、  
されば其の名も浦島太郎、太郎太郎と人の世や物の上にぞ置けよ  
かし、涙の川や枕橋、夢の歩の半程で、踏みはづしてぞどうと落  
ち、醒めて口惜しき初雁の音信も浪の岩蔭の、その亦影の影の國、  
あるか無いかの龍宮に、何で腹の子遣りやうか、さればいの、  
鹽撒いて身を淨め、龜殿に酒澤山ふるまうて、釣竿も船までも皆  
目人手に渡し、親子三人が後生を弔ふよすがともなれ、怨めしい  
乙姫様、土に凝つては蝮蛇の敏利、水に凝つては龍の業力、その  
御帶のしどけなさ、髮の環金のいやらしさ、南無阿彌陀々々々々



四  
々々々々々々々々南無阿彌陀佛、觀音様へ願掛けて、善い嫁女なり貰  
うて安樂のしたいものと口には云へど宿縁の、適に親もあきらめ  
て、十返りや、ひと昔、八朶の鏡の隅と隅、ふる春秋の憂き顔の  
曇を拂ふ最後の時の輪廻や、來ん春の彌生おかしき八重櫻遠海原  
の雲の香やうす霞、ゆらぐ日影や初時雨、事問はん都の人のうら  
ぶれて、小袖合せてわが軒に忍ぶの草や貝づくし、櫓の細枝の枝  
折戸を、洩るる青丹に狩衣があらはら見ゆる三保の浦、袖ふき返  
し何と詠む、ええ何と詠む、松原こえて、あの濱づたへ、沖つ鷗  
が、さんさんさんと飛んで九度の盃、ええ好いわいなあ、わしが  
女房は龍宮の乙姫様ぢやぞえ、乙姫様ぢやぞええ。ほんに、そち  
は歌詠ぢやなあ、漁父の悴にしほらしい、と言ふ人も都の方の言

葉は、三十ひと文字で歌の花、いざとよみ、斯うとながして、又と  
うけ、それから、それから、さうれから、二七縁日祝ひ酒、夫婦  
の契、高砂の舞の歌さへ、君が代のあやに賢きお歌さへ、萬世づ  
らりと此の句調、げにや目出度、筑波根の君のみ蔭の民草や、日  
も當らねば延延と歌ひそそめたる大和歌、京の五條に和歌姫とて、  
八雲たち八重垣つくる始より、明けて治まるみ代までに、數ある  
人のその中で、分けてすねたる名手にて、こん春の彌生の霞、立  
つとも、都の空を立ち出で、三保の浦浪、戀千鳥鳴く音をそ  
れと白砂にはのけく残る足跡をまねて型取る文字の香や、アイア  
イ、きつと和歌姫はお出ぢやと、聞いて浦島胸さわぎ、八重櫻、  
一重かさねて九重の歌のしるべを待ちかねて、雲の花一重の頃や



浦の風、ついした戀の吹きまわし、ひよんな薄衣に風邪ひいて、  
この頃は浦島どつと床に就き。七日七夜は夢見草、咲く幻の花の  
色、移らむことの悲しくて、乙姫様も善い氣な女、有らふことか  
無いことか、姿形も見せないで、夢かお伽か、お伽か夢か、好い  
加減に年寄を心配させて、親七代の因果な私の釣好きを止めさし  
ようとは業慾な、アイヤ、イヤ、イヤ、眼介も見えぬ海底に、何  
ぼう宮の有るまいもの、そりや屹度、京の五條の和歌姫様の、あ  
の若あいお優しい魂の精じやぞえ、さうぢや、さうぢや、なづとも  
盡さぬ岩ほかけ、おささのおささ、えつささのえつささ。壽や幾  
千代かけて松が枝に海の香か羽衣の裾ひるがへる舞姫の月の宮の  
淨瑠璃は、下界で聞けば玉の環の缺ける例も十五夜や、潮の満干

も加減物、三日へぬればわが年の、思ひ出多き三保が浦、天の川  
原の夕露が、ふつて出来たる天女が岩ほ。乙姫様がお座ともなる  
かいな。アイヤ、イヤ、和歌姫様がお居でたなら、昔、昔の言傳  
へ、箏築太鼓笙の笛、和歌唐の琴歌の、調はどうと白浪ぞ寄せる  
濱邊や貝の歌、風にかなづる岩ほの響、紀の貫之や白樂天、古歌  
の心を、和歌姫様が、詠んでくだんすりや、わしやほんに、乙姫  
様が念力で、浪のなり物、松の絃、空の嘯き、岩の笛、わしの父  
さんが釣り好で、わしの母さんが殺生ぎらい。めくらの龜の因果  
から、父さんが釣竿やいて、母さんが船うつて、龜さまへは酒ふ  
るまうて、乙姫様へは羽衣の舞をまうて、ええつ和だなあ、私が  
産湯は珊瑚の盥、わしが産湯は珊瑚の盥。



すでにその日も黄昏れて、親へ内所の釣道具、岩ほの影にかく  
し置き、裏の苫屋は藻鹽草、やくや煙のくるひ火に、魚の馳走も  
獨なる、獨なる身いとほしや、いとほしやの、いとほしや、觀世  
音法の手導を待ちあへず、音なう人や在原の流をくみし和歌姫よ。  
菅の編み笠、花小袖、忍びの様や従者ひとり、暮あひの景色の  
夢に路ふみたがへ、里へ三里の灸の足、葦草しげる浪花江も歌に  
こそ詠め、行いては見ないわれなれど、浪も知らずに浪の偽歌、  
澤山よむも方圖がないと、人の噂のくやしくて、都の君が音訪の  
鴈や南へかけるころ、藥玉の軒の情をあとにして、見れば見惚れ  
た三保の浦、あゆみつかれて如何にせむ、一夜の宿や歌枕、都の  
程も聞かしようなれば、花一輪の常春はうつり香ながく鄙里の橘

となんとめよかしと、千代がすみ、たな引く三保が浦浪をば、ぬ  
れし小袖に知るや都人、聞いて浦島はつと急ぎ、いざと詠み、か  
うと流すは都人の歌のためしと聞くからに、おなつかしい和歌姫  
さま、疾くより待つて居たわいな、と、浦島言ひ寄れば、和歌姫  
すつと立ちのいて、あら恐やの、恐やの漁りする子は恐しいと身  
ぶるひしてぞ居すくみぬ、浦島はつと涙ぐみ、許してたもれ和歌  
姫様、きのふの噂はけふの夢とやら、梅に鶯のなく日頃、都の人  
の言いやつたには、京の五條の和歌姫様は、ほんにあれそつくり  
の歌うたはんすと聞いた程に、わしや惚れて、惚れて、ほうほけ  
きよ、ほうほうけきよ。いざと詠み、斯うとながすと云ふ故に、  
鶯や戀の都の初音かな、二七、十四の文字の尾や、さればいの、



ほれてほれてぞほうほけきよなる。二親が老樹の古巢ちる花に換えて囀る鶯の情をそれと白浪の寄せる濱邊や萱が軒ひとつなる灯の青き光に垣間見て、和歌姫ぞつとして、磯ふく風も憚かるか闇にくつきり玉の願、朱の唇に星の眉眼、悪いも道理、尤もちや、尤もちや年下ぢやないかいな。夕顔や軒の行燈の影の露、ちつて淋き秋の波、ゆらぐ眼下も春の精、アイヤ氣の性かほんのり紅く潮さして、白髪に従者にうち向ひ、いつぞや聞いた三保の浦邊の漁り子で歌詠むとやら、うたうとやら、ほんに濱の者は人の氣を讀まいで物事知らぬわいなあ。

淋しき閨を假の宿、誰に遠慮もないなれど軒もる月のさやけさは千鳥の翼や銀砂子白光淨土天魔の歌か、浪のうつ音どうとうと

う。

短冊にのこる香も朝さへくれば、遠近人の振分袖の、止めてくやしい柵の浪もこすまい程ならば、世は安閑と戀もない筈、和歌姫いつか打ちとけて、浦島對手の貝あそび、ふける夜語、太郎太郎とあどけなき、貝の葉の蓑、みる房の自からなる烏帽子形、これ面白や、あれおくりやれと人事でない戀船と二人乗つたる珊瑚の盃、京にもこんな寶はない、錢金かえて得らりやうことか、あいなあこれ親御衆、この盃はどこであつらへたか、拾うたか、岩の姿をその儘に、中の自然とくぼんだ様子。今は和歌姫戀と寶の板挟み。年が違うが生れが違ふ。いやいやそんな理ではなし、あいのう親御衆、この浦島は中々の歌詠ちや



もの、京で修業させて、豪い男にしたいもの、何うやな何うやな、何も親御の了簡でできまること、悪うは思ふてくだんすな、この和歌姫がきつと請負うたと云ふも戀知る都の花は、深草の鶉ほどには口數少なくななく袖しぼる。さんごの盃にさんの湯とつて、十八一期で親子の分れ、運命松が枝ふく風の心に老の灯びぞ消ゆる間際の空頼め、頼みすくなのゆく末や、はて何とする、いえいえこれには因果がご座る。

千代をかけて岩ほと謠う羽衣の舞の舞臺や三保の浦、み惚れて遠い海の底、龍宮城の乙姫君が、深いご縁のかたい御錠や珊瑚の盃、朱の幸の樹お芽でたき、ことしや十八結ぶの紐を、ひよんな利業で切りやんしたら、そりや撃が生えたと云ふもの、なあ忪き

き分の無い、頑はない、年嵩な意地悪な蚯蚓の精の横笛を吹くは適切、魚屑をたまして釣らうの悪功計、簪取つて梳ぬけば百の蛇がのたうちめぐる、和歌姫さまとは妖怪姫さまちやぞえ、恐やの恐やの恐やのやあ、と白頭頭をふりかさし、前後を忘れ咆えたける。浦島姫にすがり付き、

底井も知れぬ海の世や、悪徳の花の咲く所思ひつもればこん春は、魔縁の龜雄が法の船こがれくる日もこよひかあすの永の別れを何とせう、ええなんとせう。ぬめ幻や花輪の影、夢の小鳥が讚美歌に、奈良は白木の宮所、京は祇園の袖振所、人のすむなりや神住まふ、樂は苦の種、苦は樂の種、さんたまりあが薊の乳房、すへば甘い唇される。戀とはこなん乳の味ちやもの、切なから



うが初戀じやもの、まいて二人は日の本の、親が着せたか、世界  
 が着せぬ戀の衣の袖うち合せ、朝またきにぞ別れける。別れける。  
 起き伏し思ひ吳竹の、日數つもれば物貫ふ浦島が子の袖の露、  
 浮く月魂の鏡にやどすわが顔の、窶るも道理、京は五條の橋の上、  
 夜遊のみ座や歌合せ、糸竹管絃の興ふかく、朱の欄干に雪洞の影  
 も流のおぼめきて、烏帽子、直垂、水干の公卿まじりに和歌姫は、  
 ほろ酔ひ機嫌に偽歌たんと詠むと見ゆ、音のふ人のありと聞き、  
 そは誰やらむ浦島が、ほんに善う來たわいな、來たわいな、なん  
 とな乞食の、物貫の、あいなあ珊瑚の盃もて來たか、ここに通し  
 やれ、持てきたか、なに持てまいらぬか、こんな奴わしや知らぬ  
 わいなあ、追ひ出せつき返せ、浦島嚇とせきこみて、歌の修業に

來たものを、きつい事言はんすな和歌姫様、盃がほしくばいつに  
 ても進ぜうものを、あんまりな。おう、ほんに、親が許さぬ戀衣  
 やぶれて後は、片男波ぬれて迷うて來たものを、  
 ここへ通りや、姿形もその儘に耻知つてか耻知らずにか戀の心  
 ぞいとほしき、二人ならんでうれしげな、人ぢやもの人ぢやもの  
 歌よまんで何とする、これ申、これなるは三保が浦わの貝拾ひ、  
 名もなき歌の妙手ぞや、歌うて見やれ、うたはんせ。と云はれて浦  
 島氣を兼ねつ、月あればこそ杜鵑、戀の光に照されて、美し代の  
 美し光に美し鳥、影ほのぐらうなく音かなしき。ほう歌讀んだ歌  
 讀んだ、こちやほんに歌讀ちやが乞食じやわい。物なと取らしや  
 うかと、どよめき騒ぐ酔漢もさすが優き都のお方。おうほんに姿



振形穢ふはご座んするが、珊瑚の盃、もて居るものを、そなん耻  
 がかんしやんすな、泣くには當らないこと、父ありや母なしや問  
 はん都鳥、われ思ふ人の身の上の事とませ返すにぞ浦島は泣きの  
 涙に搔いくれて、言葉を呑んで居たりける。怨み筑紫の秋風や、  
 何ぼう身繕ひが穢いとて、戀路の宿をおかす浪、夜々おそふ三保  
 が浦、初契駿河の不二を西東、眺め明すも名の通り又ない縁ぢや  
 ないかいな。心は心、情ぢやもの、情ぢやもの、え、忘れたか、  
 忘れたか何とする。人前を取り繕らうも阿呆らしい。偽歌よみの  
 心掛、え、ままよ乙姫様の念力で歌よんで耻搔いてやるわいなあ。  
 と氣も狂ほへる浦島がほつと俳句の一聲は海の底にも聞く姫ご座  
 る、聞く姫ご座る。盃ほしくは持てきてやらるか、取りに来やん

せ。わしや要らぬ。要らぬわいなあ乙姫様の夫ぢやもの。  
 口には云へど念残る。和歌姫が心もそれと量りかねてぞゆく、  
 浦島が、涙にくるゝ三保の浦、待てど會はりよう義理ぢやなし。行  
 けど逢はりやう情なや。此の儘死んではつる前。年寄つた母さむ  
 や父さんに、たつた一度のお眼通り、いざと許りに駈け入るあば  
 ら屋。盃もる親は一人や、父さんか、母さんは何うしやんしたか  
 と聞くも懶き老の顔、眼シヨボシヨボ鼻シクシクとそなたが行い  
 て程もなく、龍宮城へお詫にと、朽木の盃、貝杓子、氣も狂ほう  
 てか止めるも聞かず漕ぎ出し、三日見ぬ間に土佐衛門、おうい、  
 おうい、その盃船戻りやれ、太郎が歸つて來たわいなあ。と呼ぶ  
 隙もあれ息絶えぬ。



跡には残る浦島の、菩提弔ふその影も薄れうすれて、十八年が親の恩忘れ形身の珊瑚の盥。海を目掛けてなげやれば。ぬつくと湧いた海法師、龜夫とこそは知られける。龜甲の紋貝の蓑、聲おごさかにけらけら笑い。いざお迎と云ふが儘、跡をしたひて渡る海の底。

瑠璃の水櫛髪油、溶かして淨き素顔の天魔、乙姫様も魅せられようぞいな、浮世の塵を洗ひ洗つて行く程に、珊瑚の華表眞珠の路、踏む足ことに光する、仰ぐ瞳に火が映る。美きものの極は不可思議よ、不可思議のことの極は恐かな。宮はいづくと問ふ程に、瑠璃の臺や葡萄の柱、房なす金の沈黙は、神の酒かや愛の精、ふと現はるる裸體の美人、人手形海の星かや額にかざす。ほんに浦

島善う來やんした乙姫がまつて居るわいな。今ここに見えやう程に、とつくと物を見て、そして、茫然して居やんせなあ、ここは藝の宮ぞや乙姫は詩ちやぞいなあ。おう參られた、參られた。葡萄かざりの髪の毛や、額にかざす珊瑚の十字架、よう來やんしたなあ浦島、そなたが娑婆で爲たことは、皆目ここで聞いて居た。おうこれは乙姫様、と、ふし拜む浦島が子に手を當てて、藝に様付は可笑ぞいな。なんの遠慮や恐いことがあることか、でもこんな不思議の極は恐ろしうご座んする。あいなあ、見渡す限夢の色、美は人、不思議は自然、恐は世界、ここは神秘じやないかいなあ。げに淨瑠璃の常世かな、三絃の絃の弾き様も、人と自然と世界とならし、なつて神秘と云ふかいな。浦島戀のあこがれの的は見



たれど見ないも同じ、言ひ寄るすべも無いままに、姫は常世の神の影、われは日本の一重の櫻、念残る念残る遠いあの世に念のこる。乙姫様に願かけて、再び歸る道とへば、ほんになあ、あの和歌姫は私が姉、娑婆に居りやこそ、年もとる年も取る、そなたは頓と知るまいが、ここに住んだは丸一年や、若い、道理で感付いた。早う行つて逢つてやらんせな。だがのう、又來やんせ。

葡萄の冠かざし着て、娑婆へ土産の玉手匣、白珊瑚に葡萄のうち紐、封じ目は赤珊瑚の十字形、蓋に色貝かざし付け、空の匂や曙の雲の彩かや文字の光澤、呂清とこそは讀まれける。

これ申し、乙姫様、これなる文字は何と讀み、何といふ意味でござする。

伊の一番は縁起が悪い。されば遠慮の呂と書いて、秋津島根の言葉は語呂が清いと云ふことや、おほほ、おほほ、おほほ、嘘云ふた、ほんに、そなたは文字知らず、これや私が藝名ぞいのう。別れも夢の海原や、珊瑚の梯子づたひにて、歸る路こそ容易けれ、容易けれ。此處はいづこそ土佐の國、貫之朝臣が筆の跡、初雁のならむでかける京の空、五條をさして急ぎ行く歌の知邊にあひもせば、乙姫様の言傳や、逢ひたくば尋ねきて見よ、エギプトのスフィンクスこそわが姿なれ。程もなく五條の橋へつきにけり。思ひ簀か和歌姫の鬢もそそげて秋の風、なく蟋蟀に袖の霜、涙の跡と知られけり。浦島見るよりすがり付、許してたもれ和歌姫さま、かいくれ私が悪かつた。見苦しい様見せつけて人前で耻かか



いて氣の毒な、いえいえ私が悪かつた、盥のほしいばつかりに、  
 人前で耻かかいた。きつうは思うてくだんすな。これなるは娑婆  
 へ土産の玉手匣、朱の十字の封印は開けてならぬのお諭ぞ、と云  
 ふに和歌姫怒り立ち、いえいえ、蓋に呂清とあるわいなこりや私  
 が妹の藝名、そなたらは不義な、義理しらずの、犬や、犬ぢやわ  
 いなあ。と玉手箱蓋とる業も嫉妬の念力、驚く隙もうす煙、三絃  
 となつて立ちのぼる、空の雲間や三味の音、乙姫の弾きたまふら  
 む玉の聲、寂滅と紫の夜の鐘の音、聞くより、和歌姫こゑ上げて、  
 あれあの歌は、いつぞやの、いえいえ丸一年のその昔、夜遊の席  
 でこなさんが、氣狂ほうたか叫んだお聲、恐やの恐やの、恐しや  
 の恐しや。いえいえなんの恐いこと、恐れのは極は神秘ぢやと乙姫

仰せ事、さればいの、その神秘とやらいふもの見たい、エギプト  
 の沙野の末やいづこぞと、訪ひあるく落人の姿も花の櫻木になく  
 鶯の初音かな、名さへ不思議な紀伊の國、人しら浪の寄る浦にふ  
 たり沈みて失せにけり。和歌の浦とや名に通る、名に通る、物の  
 始の名にとほる。

異教の國の春 終



明治四拾四年九月二十五日印刷  
明治四拾四年九月二十八日發行



發行者兼

印刷者

印刷所

東京市麴町區四番町九番地

青 山 延 敏

東京市京橋區南傳馬町一丁目拾貳番地

合資會社 吉 川 弘 文 館  
代表者

吉 川 半 七

東京市神田區錦町三丁目一番地

神 田 印 刷 所

合資會社 吉 川 弘 文 館

發行所

東京市京橋區南傳馬町一丁目

電話東京六九九七番  
振替東京二四四番

定價金六拾錢

郵稅金六錢



